

鳥取県羽合町

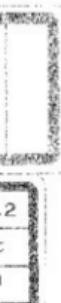
寄
贈

長瀬高浜遺跡発掘調査報告書 I

一般国道9号線改築工事(北条バイパス)に伴う
埋 藏 文 化 財 発 掘 調 査

1980

建設省中国地方建設局倉吉工事事務所
鳥 取 県 教 育 文 化 財 団



正 誤 表

頁	行 數	誤	正
調査関係者 一覧	10行	中国地方建設局倉吉工事事務所	建設省中国地方建設局倉吉工事事務所
挿図目次			
写真図版	2	SK-02	SK-01、02
写真図版	9	勾状石製品	勾長石製品
写真図版	9	SK-02のPo. 1	SK-02のPo. 1、2
写真図版	13	SK-01のPo. 5	SK-01のPo. 1
3 頁	7	内側	内壁
8 頁	4	SI-01	SI-01(挿図4、5、図版2、6、7、8、9)
9 頁	3	住居地上面	住居跡上面
9 頁	8	「く」の字状口頭部	「く」の字状口顎
10 頁	14	張り出しが	張り出し部
10 頁	28	P-01	P1
10 頁	29	住居跡	住居跡
10 頁	30	住居跡上面	住居跡上面
13 頁	5	南西側	南側
13 頁	6	高さ18cmで高く	18で高く
14 頁	5	高壙の部分	高壙の杯部
14 頁		(SI-06 Po. 1のスケール10m)	10cm
14 頁	6	(Po. 1)	(Po. 1)
15 頁	3	炭交り	炭混り
16 頁	5	最大胸径	口径
17 頁	5	焼成きな硬い。	焼成硬い。
17 頁	16	円外横ナデ	内外横ナデ
20 頁	1	額部内側	額部内面
20 頁	5	横相	横相
20 頁	8	内外とハケ目整形	内外にハケ目整形
25 頁	9	破版	破片
28 頁	20	(挿図20)	(挿図24)
28 頁	28	挿図21	挿図25
31 頁	5	2 m 45cm	2.45m
31 頁	10	第3工区の南	第3工区の北
35 頁	29	SI-01	SK-01
39 頁	16	豊穴住居跡	豊穴住居跡
44 頁	14	遺物がないのが	遺物がないが

序　　言

ここに、国道9号線北条バイパス予定地の文化財調査報告書をおおくりする。この調査は、当財団が、建設省中国地方建設局の委嘱を受けて実施したものであって、当財団が鳥取県の委嘱により、數年来実施しつつある大神净化センター予定地の調査とは、行政的には全く別のものである。

しかしながら、この両者はともに長瀬高浜遺跡に所属し、しかもバイパス予定地が、净化センター予定地の北縁に近く東西にのびる事から、我々は長瀬高浜遺跡の北限を決定し得る期待に大きく胸をふくらませたのであった。

調査の結果は、正に我々の期待を裏付ける事となったのは大きな収穫であった。

しかしながら、道路予定地は当然のことながら幅員が狭少であって、遺跡上の砂の堆積の厚い処では掘削が不可能であり、調査は西部約半分に止めざるを得なかつた。

終りに、この調査を実施するにあたって、主管の建設省倉吉工事事務所を始め、例の如く、净化センター予定地の調査に、御指導と御協力を下さった方々に、併せて御指導・御協力を頂いた。ここにその御好意に対して、心から感謝の意を捧げるものである。

昭和55年3月

財團 法人 烏取県教育文化財団

常務理事 木 村 耕 造

<10>0100574912



調査関係者一覧

総括	木村 耕造	鳥取県教育文化財団常務理事
	巻田 明	同 事務局長
調査主任	影山 和雅	鳥取県教育文化財団調査員
調査員	中村 徹	同
	門脇 豊文	同
調査指導	清水 真一	鳥取県教育委員会文化課
調査協力	田中 精夫	西村 彰滋 近藤 滋 笹尾千恵子 津川ひとみ
	大賀 靖浩	国田 一夫 赤石 二郎
	鳥取県教育委員会文化課、中国地方建設局倉吉工事事務所、羽合町、羽合町教育委員会、羽合町公民館、羽合町長瀬・橋津・久留・光吉・浅津・宇野・田後地区及び東郷町門田・長江地区から多数の方々の協力を得た。	

例　　言

1. この報告書は昭和54年6月1日から建設省の委託を受けて、鳥取県教育文化財団が一般国道9号線改築工事（北条バイパス）建設予定地内にかかる長瀬高浜遺跡を昭和54年6月1日から、昭和55年3月31日まで発掘を行なった報告書である。
2. この報告書は、影山和雅、中村徹、門脇豊文が討議を行ない分担執筆を行なった。
3. この遺跡から出土した遺物等は、コンテナに収容し、旧羽合町役場に教育文化財団が保管中である。
4. この報告書において、堅穴住居跡はSI、掘立柱建物跡はSB、土壌跡はSK、木棺墓跡はSX、溝跡はSDとした。
5. この報告書の北は磁北を示す。
6. トレース等に協力を得た、佐々木良枝、堀内幸子、福島知恵子、久葉玲子、岩木鶴代の方々に感謝します。

目 次

序 言

関係者一覧

例 言

目 次

挿図目次

第1章 発掘調査の経過について	(1)
1. 発掘調査までの経過	(1)
2. 遺跡の発見	(1)
3. 発掘調査日誌	(1)
4. 発掘調査の経過	(2)
第2章 遺跡の位置と環境	(3)
第3章 発掘調査の結果	(8)
1. 第1工区	(8)
(1) 竪穴住居跡 (SI)	(8)
2. 第2工区	(12)
(1) 木棺墓 (SX)	(12)
3. 第3工区	(13)
(1) 竪穴住居跡 (SI)	(13)
(2) 掘立柱建物跡 (SB)	(21)
(3) 溝状遺構 (SD)	(28)
(4) 土 壤 (SK)	(31)
(5) 集石遺構および線刻石	(32)
(6) 鉄製品と石製品・玉製品について	(35)
第4章 考 察 編	(39)
1. 石製模造鏡	(39)
2. 黒砂の分布	(41)
第5章 ま と め	(44)

挿 図 目 次

挿 図	
1. 東郷池周辺の遺跡分布図	4)
2. 遺跡全体の遺構図	5)
3. 調査位置図	7)
4. SI01遺構図	8)
5. SI01内出土遺物図	11)
6. SX01・02遺構図及び遺物図	12)
7. SI02・06遺構図	13)
8. SI02・06出土遺物図	14)
9. SI03遺構図	15)
10. SI03内出土遺物図	15)
11. SI04遺構図	17)
12. SI04内出土遺物図	18)
13. SI04内出土遺物図	19)
14. SI05遺構図	20)
15. SI05内出土遺物図	21)
16. SB01遺構図及び遺物図	22)
17. SB02遺構図	23)
18. SB02内出土遺物図	24)
19. SB03内出土遺物図	24)
20. SB03遺構図	25)
21. SB04遺構図	26)
22. SB05遺構図及び遺物図	27)
23. SD02遺構図	29)
24. SD03遺構図	29)
25. SD01・04遺構図	30)
26. SK01遺構図及び遺物図	31)
27. SK02遺構図及び遺物図	32)
28. 集石遺構及びノコギリ状加工石尖頭図	33)
29. 線刻石及び付近の遺物実測図	34)
30. 鉄製品実測図	35)
31. 石製品実測図	37)
32. 上製品実測図	38)
33. 模造鏡集成図	40)
34. 黒砂の分布概念図及び白砂中山土器実測図	42)
35. バイパス地区的黒砂分布状況	42)
36. 黒砂分布全体図	43)
写真図版	
1. 第3工区全景	45)
2. SI01・02・03・06・04とSK02の遺構写真	46)
3. SI05、SB01・02・03とSD01・04の遺構写真	47)
4. SB04・05とSX01・02の遺構写真	48)
5. 集石遺構とSK01の遺構写真とSK01の遺物出土状況	49)
6. SI01のP _e 4・5	50)
7. SI01のP _e 6・17・18・20・21	51)
8. SI01のP1内S1出土状況	52)
9. SI01勾状石製品、石鎌、石製模造鏡、SK02のP _e 1とSI02のP _e 1・2と第3工区出土弥生土器	53)
10. SI03のP _e 1・4とSI04のP _e 5・7・9・23	54)
11. SI04のP _e 2・3	55)
12. SI04のP _e 4・11	56)
13. SI05のP _e 1・2とSK01のP _e 5とSB02のP _e 3	57)
14. SB02のP _e 1・4・9・10・5・8・2	58)
15. SB03のP _e 1・2・3・4・5・6とSB05のP _e 1	59)
16. 集石遺構内ノコギリ状加工石	60)
17. 線刻石	61)
18. 石製品、勾玉出土状況、管玉出土状況、鉄製品(針)出土状況	62)
19. 鉄製品(鉄鎌・鉄斧)出土状況、鉄製品、白砂中出土状況、白砂中出土土器	63)

第Ⅰ章 発掘調査の経過について

第Ⅰ節 発掘調査までの経過

建設省は一般国道9号線改築工事(北条バイパス)を着手するに当たり、工事区域内に存在する長瀬高浜遺跡を調査する必要性が生じたため、54年度の発掘調査区域(2,000m²)について、鳥取県教育委員会文化課、鳥取県教育文化財団と協議を行なった結果、鳥取県教育文化財団が発掘調査を昭和54年6月1日から昭和55年3月31日まで行うことと決定した。

第Ⅱ節 遺跡の発見

昭和49年5月に鳥取県教育委員会文化課の行なった一般国道9号線改築工事(北条バイパス)に伴う遺跡分布調査で、鳥取県東伯郡羽合町長瀬部落の北に所在する字名、高浜、喜平柳、浜根荒神と呼ばれる地域に弥生土器、土師器、板状石等が畑一面に散布していることが、この遺跡発見のきっかけとなった。

第Ⅲ節 発掘調査日誌

昭和54年6月1日	第1工区の調査開始。
6月4日	第1工区ABグリットにおいて黒砂層検出、土師器片多く出土する。
6月16日	第1工区AグリットにおいてSI01検出。
6月26日	SI01内から石製模造鏡。
6月27日	ボーリング調査において、15ライン付近から東に黒砂層のあることを確認する。
7月10日	SX01検出。
8月20日	第3工区黒砂層上面の白砂排除を重機にて行う。
9月3日	第2工区と第3工区の黒砂層表面の等高線実測終了。
9月4日	黒砂層表面にグリット設定(8m×8m)
9月13日	第3工区掘下げ開始。
9月26日	第3工区Bグリットの東側において集石遺構検出。
10月5日	SK02検出。
10月13日	SD01検出、SD02検出、SD03検出。
10月24日	SD04検出。
11月26日	SI02とSI04検出。
12月6日	SI03検出。
12月10日	SK01検出。
12月15日	SI06検出。

昭和54年12月19日 SX02検出。
12月20日 SB01、SB02、SB03、SB04、SB05検出。
12月26日 発掘調査区域うめもどし終了。
昭和55年1月4日 報告書作成作業に入る。
1月20日 土器洗い終了。
3月1日 遺物実測終了、土器復元終了。
3月16日 印刷。
3月31日 報告書完成。

第4節 発掘調査の経過

発掘調査に入る以前から当発掘調査区域内における黒砂層の堆積状況が問題となっていたので、ハンドオーガーボーリングを行なったところ、第1工区のABグリットで黒砂層を検出した。しかし、第1工区、第2工区の黒砂層は遺構としてのこっている場所以外は、何らかの作用によって黒砂が削りとられた状態になっていた。この結果を参考にし、最も急ぐとされる橋梁建設区域（第1工区）(40m×10m)を発掘調査し、ついで第2工区(40m×20m)を、そして、最後に第3工区(40m×20m)を発掘調査した。第1工区を掘下げると、ABグリットにおいて黒砂が検出されたが、この両グリットとも長芋耕作が行なわれた跡があった。Aグリットにおいては、SI01が掘り込まれていた為に、黒砂の堆積がひょうに厚くSI01の床面から黒砂上面までは2m10cm前後を測った。また、この住居跡からは滑石製模造鏡、勾玉状石製品が出土している。7月に入ると、第2工区の発掘調査に入ったが、この調査は、ひとつの問題として、黒砂と白砂の境界を明確にすることにあった。この白砂と黒砂との境界ラインは、插図35で明らかなように、ほぼ15ラインにそって現われてきた。同工区Dグリットにおいては黒砂層が部分的に有り、掘下げるとSX01があらわれた。第3工区の黒砂層の上の白砂の堆積は、2m前後であることがハンドオーガーボーリングにより確認されていたので、重機を使用して、黒砂層30cm上までの白砂を排除し、その後にベルトコンベアを使用し、人力によって白砂を排除するという方式をとった。9月に入ると8m×8mのグリットを設定して、黒砂層の掘下げを行ったところ、南の下水道地区と同様に土師器群があらわれた。10月に入ると調査が進み、全体の遺構図に示したように遺構を検出することが出きた。バイパス地区の主な遺構は、竪穴住居跡6棟、掘立柱建物跡5棟、溝状遺構4基、土壙2基、木棺墓2基、集石遺構1基である。

第2章 遺跡の位置と環境

長瀬高浜遺跡は鳥取県東伯郡羽合町長瀬大字高浜に所在する。羽合町は、鳥取県の中部、東伯郡の北東に位置する面積12.41km²、人口6,783人の地方都市である。東部の山地、東郷町南部から北条町南部にいたる山麓、西方の茶臼山などコの字に囲まれた日本海沿岸の海拔10mたらずの平坦地は、犬神川の自然營力によってできた沖積平野で、新生代の第3紀の終わりから、第4紀ごろにだいたいできあがり、その後もたびたびの洪水によって流出した土砂が堆積したものである。

長瀬高浜遺跡は、天神川の下流域右岸、北条砂丘の東側に位置し、海岸から約1,000mの内側に位置する。砂丘はその最高点が17m余りで、ドーム状の形態のやや孤立した地形である。このドーム状砂丘地形の西側斜面の下に、新砂丘の白い砂におおわれた長瀬高浜遺跡が存在する。この砂丘の北方や西方は海拔4～6mの平坦な砂堆状地形が発達している。この平坦な地形をつくる砂は、砂丘の砂よりもやや粒度が粗く、地形が平滑なことから北条砂丘の北部、西新田場から台場跡にかけてみられる海拔5～6mの浜堤地形と同じ海の波によって形状された海成堆積地形であると考えられる。

砂丘および砂堆地形の南端には長瀬の集落が東西に細長く分布し、その南方には沖積平野が展開している。砂丘地帯に接して沖積平野の北側に天神川の旧流路がみられ、天文年間（1736～1737年）の天神川の改修直前以前は、田後から長瀬西端に下り、さらに村の南縁をすぎ東郷池尻の橋津川に向って流れていったと考えられる。当時北条浜と一連であった長瀬浜の部分は折半して、北条東分、北条西分とされていたことが、正嘉2年（1258年）の『東郷庄園絵図』でうかがわれる。

これらの新砂丘の下に黒砂におおわれた旧砂丘がかなり広く分布しているらしく、この旧砂丘地層に古墳時代を中心とした遺構が存在している。

周辺の遺跡としては、弥生時代の銅鐸の出土地と知られる泊・小浜遺跡、東郷・北福第1遺跡がある。また、当遺跡の北西にある長瀬第2遺跡では弥生土器がでている。全体的には弥生時代の遺構は発掘例が少なく不明な点が多い。

古墳時代に入ると、全長100m（推定）の前方後円墳である馬ノ山4号墳に代表される馬ノ山古墳群、全長90mの狐塚古墳を中心とする宮内古墳群、山陰最大の前方後円墳で全長110mを測る北山1号墳を盟主とする北山古墳群、東郷池から日本海を展望できる丘陵上に作られた大平山古墳群が東郷池をとり囲んでおり、当時の政治集団の盛衰をうかがうことができる。

奈良時代には、東郷池の東に野方庵寺、久見庵寺があり、天神川を逆のぼれば大原庵寺、大御堂庵寺があるが、羽合町のあった河村郷では寺院の建立がなされていない。そして、伯耆国府や国分寺に見られるように、政治経済の中心は、東郷池周辺から倉吉平野へと移行していった。

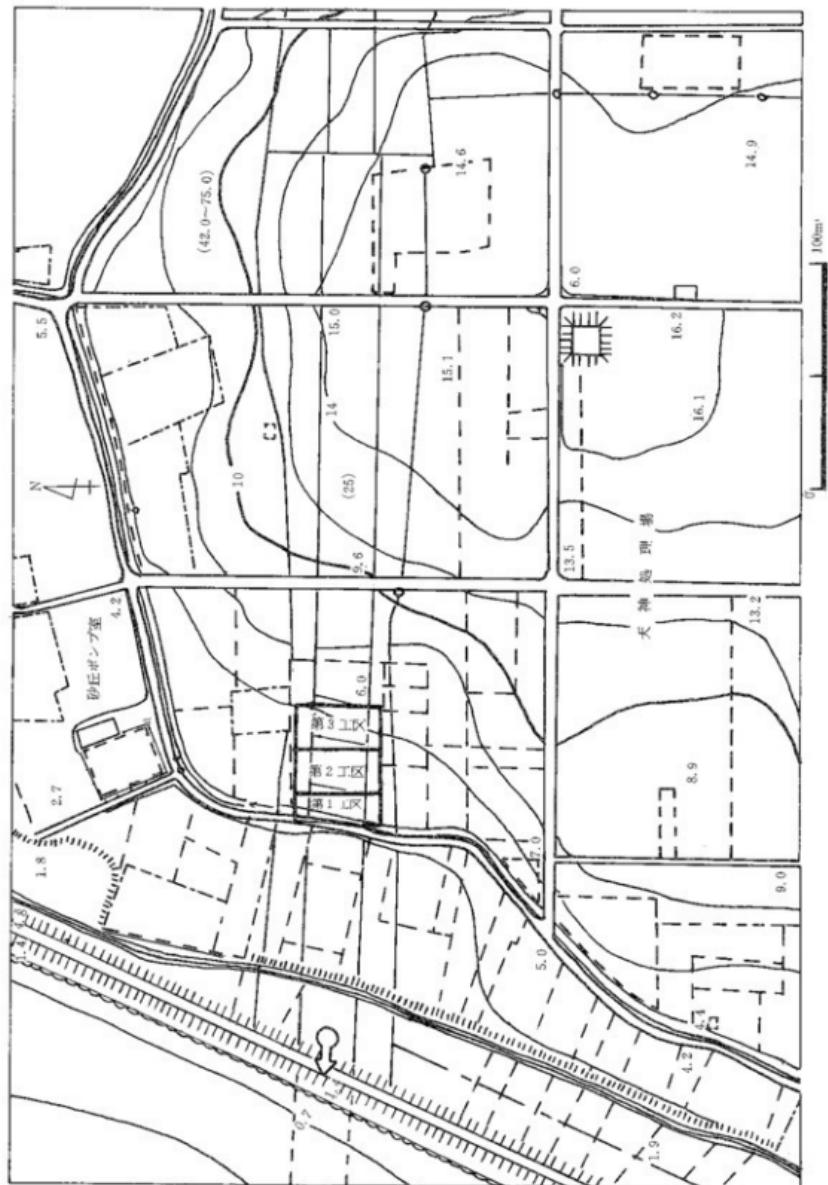
しかしながら江戸時代に入ると、橋津は鳥取藩の藩倉として栄え、北前船の寄港等もあったが、国鉄山陰線の開通とともにその機能を失ってしまった。



插図1 東郷池周辺の遺跡分布図



図2 遺跡全体の造構図



挿図3 調査位置図

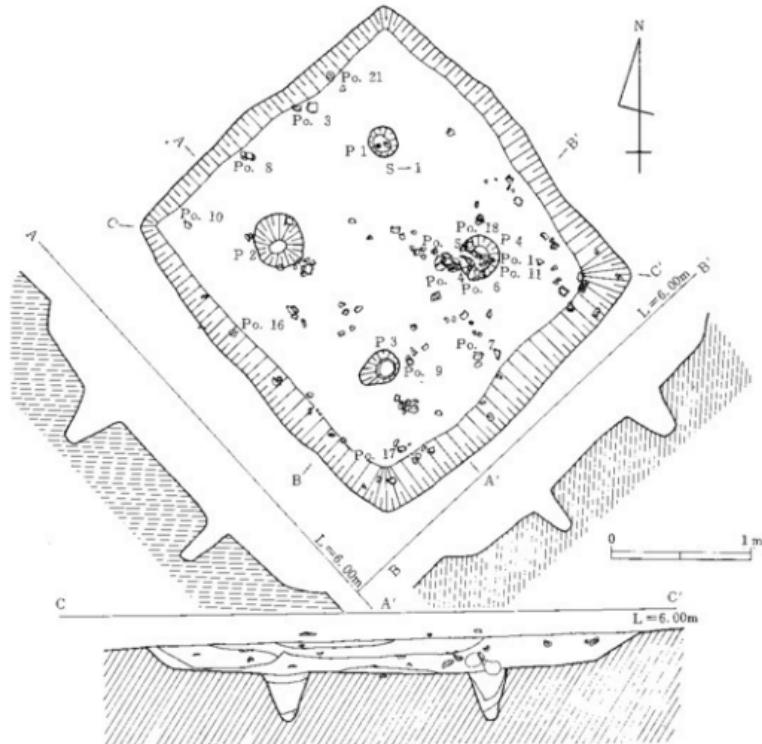
第3章 発掘調査の結果

第1節 第1工区

(1) 穴住居跡 (S I)

S I 0 1

第1工区の南東に位置し、一部調査区域外にも及んだ。平面形は方形で、床面の大きさは長軸5m、短軸4.40mで、床面積22m²である。壁高は南東側で最大値44.2cm、北東側で最小値20cmを測る。柱穴は4個検出した。プランはP₁ (45×40-70)、P₂ (80×70-70)、P₃ (45×62-72)、P₄ (58×63-86) cmであり、そのうちP₃において柱痕と思われるもの (26×30-60) cmを検出した。柱間距離はP₂、P₃間の2.35mをのぞけば、全て2.15mである。特殊ピットなど、



插図4 S I 01遺構図

他のピット類は検出できなかった。

床面一面に、壺・甕等の破片や、加工されたと思う河原石、石製模造鏡等が出土した。また、住居地上面よりは埴輪片も検出された。

壺形土器 (1) 外湾する頸部に外反して聞く複合口縁をもつ。頸部上部が内湾氣味に外方に屈曲し口縁は先端で延び端部は丸く終る。外面口縁を横ナデ、頸部は縦方向のハケ目のあと横ナデ。内面口縁～頸部にかけて横ナデ。肩部上面を横ヘラ削りで仕上げる。乳白色、緻密、硬質、口径19cm。

甕形土器 (2) 「く」の字状口頸部で口縁は内湾氣味に聞く。器肉は頸部の少し開いた所で少し張らみ、ゆるく凹凸しながら端部に行くほど薄くなる。端部はつまみ上げたのち軽く外側に返る。肩部より下方は急に器肉が薄くなる。外面口縁～肩部にかけて横ナデであるが、頸部において斜めのハケ目が見られる。腹部において、上方を横ハケ、下方を縦斜めのハケ目で仕上げる。内面口縁～頸部にかけて横ナデ、肩部より胴部にかけて横ヘラ削り。石英砂、雲母等を少し含む緻密な胎土、硬質。外面赤褐色と黒灰色、内面赤褐色。(3)斜めに立ち上がる複合口縁で稜をなす。頸部上方より聞くにつれて器肉が厚くなっている。外面口縁～肩部にかけて横ナデ、胴部は縦ハケのあと横、斜めのハケ目、内面口縁を横ナデ、肩部上方に細かいハケ目がみられる。肩部より下方はヘラ削り。やや大粒の石英砂を多く含む胎土。硬質。外面赤黄褐色。内面赤褐色。(4)「く」の字状口頸。口縁は内湾氣味に斜めに立ち上がる口縁をもち、口縁端面を内側に肥厚させる。胴部は球形をなす。外面口縁～肩部にかけて横ナデ、胴部より下方を横ハケを基調としてハケ目で仕上げる。内面は口縁から胴部のはり出したところまで横ナデで、下方をヘラ削り、底部を指圧で仕上げる。頸部において亀裂がみられる。2~3mm大の石英砂を多く含む胎土。硬質。外面灰褐色にススが付着、内面黄褐色。(5)は(3)と同様な複合口縁をもつ。口縁端部が肥厚する。胴部は丸く張らむ。内外口縁～肩部を横ナデ、上面胴部上方を横ハケ、下方を斜めハケ目、内面胴部ヘラ削り、底部を指圧。やや大粒の石英砂を多く含む胎土。硬質。外面淡灰黒褐色、内面淡赤褐色。(6)やや斜めに外反しつつ立ち上がる複合口縁。端部はなでられやや凹縫氣味にへこみ、端部が外へ少し肥厚する。口縁～頸部まで横ナデ、肩部を縦のハケ目、そのすぐ下より横ハケに移行し胴部から斜め、縦のハケ目。内面は、ヘラ削りで底部は指圧。器形全体に、重さを乾燥に起因すると思われるゆがみがある。やや大粒の石英砂を多く含み硬質。赤黄褐色。

高杯形土器 (7~9) 外反氣味に聞く浅い杯部をもつ。(7)(8)は剥落が著しいが、(7)は縦ハケの後細いヨコヘラミガキ、赤褐色。(8)はヨコナデ、赤乳色。(9)はヨコナデのあとヘラミガキ、内面をヨコナデのあとヨコヘラミガキ、最後にタテヘラミガキで仕上げる。内外面とも丹彩。(10)杯底部に棱を持ち、体部は外反氣味に聞く、端部で更に外反して先細り氣味に終わる。外面ナデ、内面に横、斜めのヘラ磨き。淡赤乳褐色。(11)緩やかに外反する裾をもつ。円形透孔3を有す。端部断面は矩状たるし、稜が鋭い。外面は斜めのハケの後縦のヘラミガキをし、最後に

横へラ磨きで仕上げる。内面は柱状部ではヘラ削り、裾部下方において放射状のハケ目。淡赤褐色。

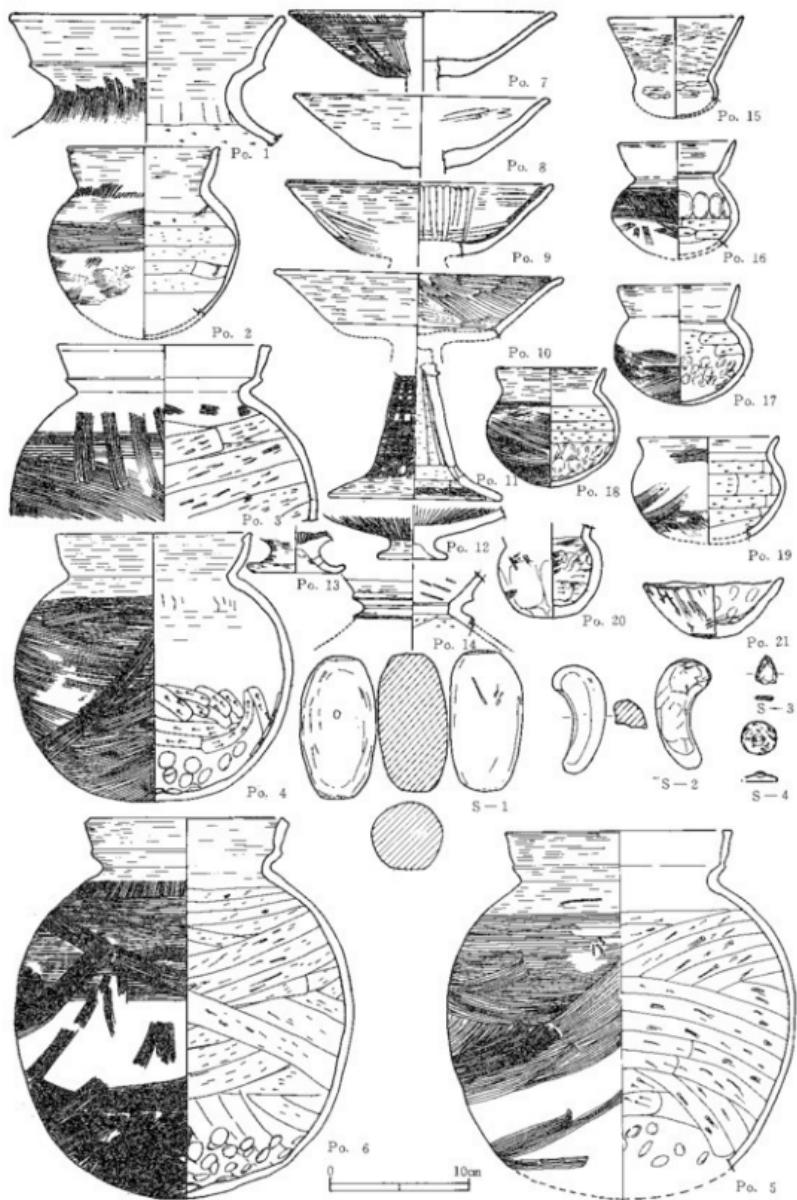
低脚杯形土器 ⑪浅い杯部に外反して開くつまみ状の脚部をもつ。脚部は先細で接地面が大きい。杯部内外面とも放射状のヘラ磨き、脚部は内外面とも横ナデ。外面淡赤褐色。内面淡黄赤色。⑫外反して開く脚部、開くにつれて器肉が薄くなり、端部が上方にそり反るため、接地面が少ない。円形透孔1を有す。杯部内面を放射状のヘラ磨き、脚部内外面とも横ナデ。淡黄褐色。

器台形土器 ⑬受け部と台部の接合部の間隔が縮まった鼓形器台。受け部は内湾気味に開き、端部は鋭く外反するとと思われる。稜は鋭い。外面は横ナデ、受部は横ないし右下りのヘラ磨き、台部は横または左下りのヘラ削り、接合部はヘラで面とりしている。赤褐色。

小型丸底壺 ⑭口縁部が外方に大きく開き、扁球状のやや小型の胴をもつ。口縁を開くにつれて器肉が薄くなり、端部を軽くつまみ上げている。胴部から底部にかけて器肉が非常に薄くなると思われる。内外面とも横へラ磨き、赤乳色の緻密な胎土。⑮外反する頸部から内湾気味に斜めにのびる口縁をもつ。胴部は綾の後横方向のハケ目。内面は張り出し部より上半が指圧、下半が横へラ削り。橙黄色の緻密な胎土、軟質。⑯⑰と同様外反して頸部から斜めにのびる口縁があるが、⑯と比べて口縁が短く、胴の張りが上半にくる。外面口縁～胴上半にかけて横ナデ、下半を斜めのハケ目、内面、頸部から張り出し部分の上方をヘラ削り、下半指圧、橙黄色。⑱更に口縁が短くなる。端部は軽く外側に反り、丸い。口縁部は内外面とも横ナデ肩部は綾ハケ、その下方より右下りのハケ目、内面は、胴部上半は横へラ削り、下半を指圧、暗褐色の緻密な胎土。⑲口縁が短く外反し、やや扁平の胴部をもつと思われる。口縁端部は丸くつまみ上げられている。口縁内外面とも横ナデ、頸に横ハケが見られる。胴部下方に、横、斜めの細いハケ目がみられる。内面は横へラ削り。赤褐色の緻密な胎土。

手捏ね土器 ⑳口縁部を欠いているが、内湾気味に短く立ち上がる「く」の字口縁であると思われる。ヘラで面とりした後ハケで調整している。内面は、指による整形と横ナデ。外面赤灰褐色、内面淡黒灰色である。これは小型丸底壺の範疇に入るかもしれないが、一応は手捏ねとした。㉑内湾気味に外に開く鉢である。端部は丸い。細砂多く含み、亀裂が多い。赤黄褐色、底部は明黒色。

その他 S-1、P-01より出土。朱のすり石かと思われる。S-2 勾下状石製品、片面は欠損している。S-3 石鏃、S-4 石製模造鏡、住居址の北側より出土した。その他、この住居址上面からは埴輪片が数点出土している。



插図5 SI01内出土遺物図

第2節 第2工区

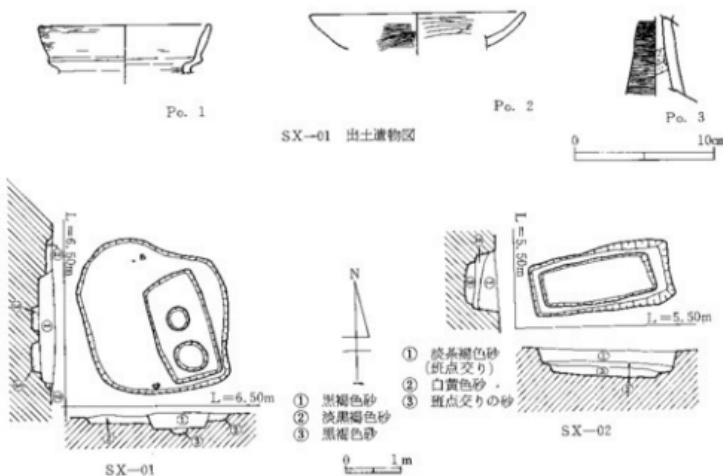
(1) 木棺墓(SX)

SX 01 (挿図6、図版4)

第2工区Dグリットの中央部に位置し、第1工区SI01の北東にある。平面形は不整形な方形で二段の掘り方をもつ。主軸はN-22-Wで、上縁部長軸1.52m、短軸0.83m、深さ0.10mの方形の中に長方形の棺部をもつ。上縁部長軸1.52m、短軸0.83m、深さ0.10mである。四壁はほぼ垂直に掘り込まれており、木棺が安置された可能性が強い。この木棺の下から大小2つのピットが検出された。プランはP₁(45×44-10)、P₂(30×32-8)cmである。ピット内からの出土遺物は認められず、この木棺墓との関係は不明である。

SX 02 (挿図6、図版4)

白砂と黒砂の境界であるポイント15Lの北1mに位置し、第3工区SB01、SD04の西にある。平面形は方形で二段の掘り方をもつ。主軸N-88-Eで、上縁部長軸2.50m、短軸0.85m、深さ0.25mの掘り方の中に長方形の棺部をもつ。上縁部長軸2m、短軸0.54mである。四壁はほぼ垂直に掘り込まれており、木棺が安置された可能性が強い。埋土は上層より、淡茶褐色砂・白黄色砂・黄色の斑点交りの砂の3層に別れる。遺物は認められなかった。



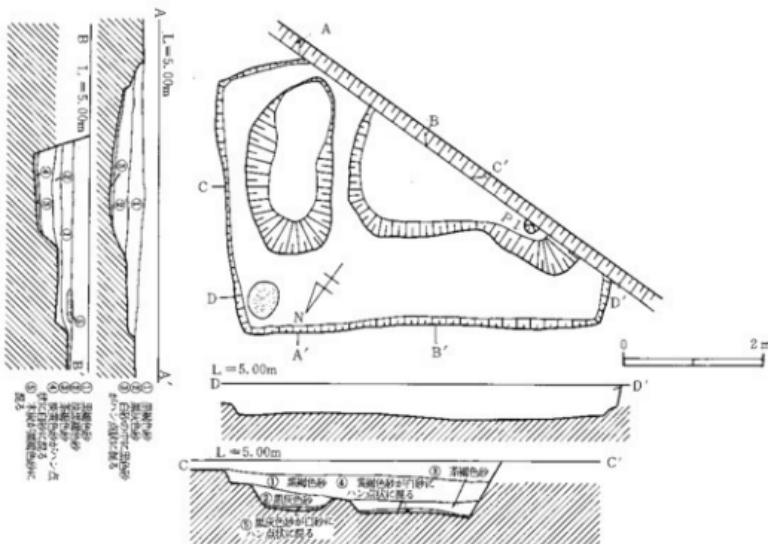
挿図6 SX01・02遺構図及び遺物図

第3節 第3工区

(1) 竪穴住居跡 (S I)

S I 02 (挿図7・8、図版2・9)

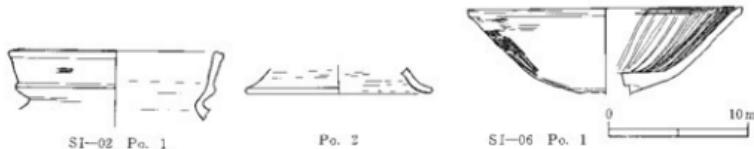
第3工区の最も南側に位置し SI06、SK01と重複している。また西側には近世掘込みがある。形態は長方形になるが、南西側は調査区域外なので未掘である。床面一辺は長辺5.42m、短辺3.46mを測る。壁高は北西側が高く18cmで高く、南東側が6cmと低い。柱穴は検出されなかつた。北東の壁下コーナーにおいて木炭を含む焼砂面を検出した。木炭の小破片の広がりがあり、その下が焼砂面となっていた。焼砂面の広がりはほぼ円形で直徑52cmを測る。この竪穴住居跡内の床面での出土遺物は、器台(Po. 2)の底部と甕(Po. 1)の口縁である。甕の口縁は横ナデの技法を行い、外側にススが付着している表面の一部は胎土が剥離している。胎土は石英、雲母を含みやや荒い、色調は内側のススの付着していない部分で黄褐色である。焼成度は良好。器台は底部の破片である。脚端部分がやや外側に反り返る。外側は横ナデの技法を行い、内側は脚端部分から2cmほど上は横ナデ技法を行い、その上はヘラ削りを時計回りと反対方向に行なっている。胎土はきめの細かい粘土を使用し、石英、雲母を含む。色調は外側で白乳色、内側はうすい赤褐色を示している。焼成良好。北側の床面での検出である。甕(Po. 1)がこの住居跡の時期を示すと考えられる。



挿図7 SI02・06遺構図

S I 0 6 (挿図7・8、図版2)

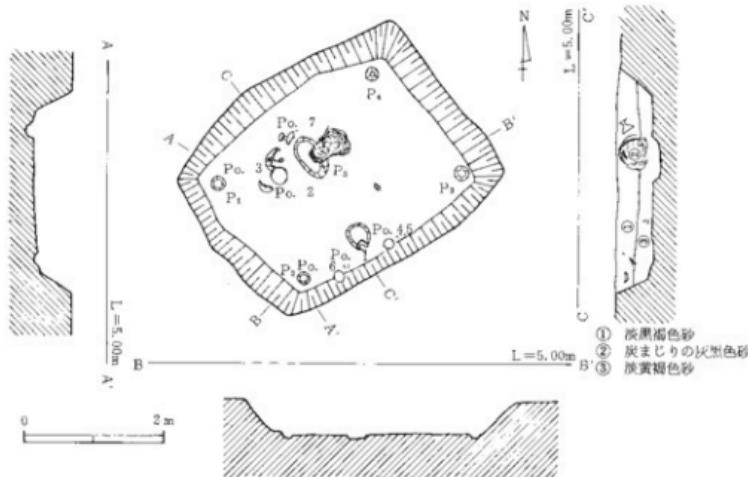
第3工区の南側に位置し、SI02と重複している。東にSK01がある。南側は調査区域外のために未掘である。形態は方形もしくは長方形になると考えられる。壁高は東面で19cm、北西面で26cmを測り、床面は南側で少し低くなっている。ピットは南西のコーナ下に検出され(P_1)、半分は調査区域外にて未掘であるが、プランは(22×—25)を測る。出土遺物は高杯の部分が検出されている(P_{01})。内側は放射線状にヘラ磨きを行い、口縁部から1cmほど内側に向って横ナデを行なっている。内側は中心から外側に向かってハケ目整形を行いその上にナデを左右に行なっている。表面には赤色顔料の塗布を行なっている。胎土は石英、雲母混りで、ややきめの細かいものを使用し、色調は赤褐色である。焼成良好。



挿図8 SI02・06出土遺物図

S I 0 3 (挿図9・10、図版2・10)

第3工区の北側に位置し、SI04の南、SB03の北、SB04の北西にある。平面形はやや不整形な方形で、床面の大きさは長軸3.32m、短軸2.20m、床面積7.31m²である。壁高は南側で最大値0.52m、北西側で最小値0.42mを測る。柱穴は四隅にそれぞれ4個検出した。プランは P_1

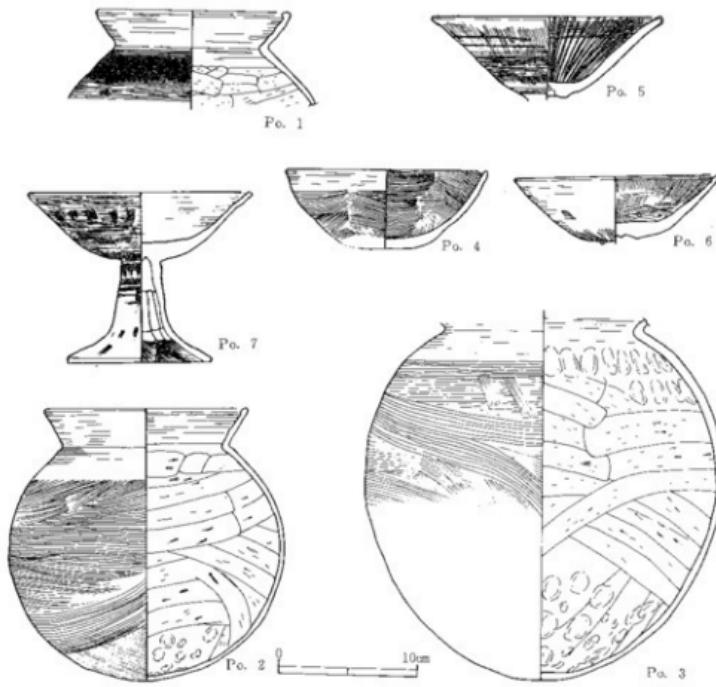


挿図9 SI03遺構図

($18 \times 18 - 8$)、P₂($20 \times 21 - 11.5$)、P₃($16 \times 18 - 8$)、P₄($21 \times 20 - 8$) cmである。柱間は、長軸2.75m、短軸0.90mである。床面中央のやや北西よりには、(65×98-10) cmの楕円形の特殊ピットが配されている。この特殊ピットの東側に、炭交りの灰黒色砂が(20×30-20) cmのポール状で検出された。この他に、中央の南東に(40×35-5) cmのピットが検出された。

SI03では、遺物は比較的少なかった。

甕型土器 (1)やや内窓気味に斜めに立ちあがる口縁をもち、口縁端面を内側に肥厚させる。口頭部を横ナデ、肩部は横ハケの後縫ハケ目。内面は肩部より上方を横ナデ、下方をヘラ削り。石英砂をわずかに含み緻密、硬質。外面は灰褐色、内面赤褐色。(2)上部がやや外反する「く」の字口縁をもち、口縁端部を内側に肥厚させる。胸部は球型に丸く張る。外面口縁～肩部にかけて横ナデ、肩より下方を横、斜めのハケ目調整。内面口頭部を横ナデ、胴部上半を横ヘラ削り、下方を右下りのヘラ削り、石英砂を含む。灰褐色と黒灰色。(3)口縁を欠いているが、やや内窓気味に斜めに立ちあがる「く」の字口縁をもつと思われる。胸部はやや倒卵形をなす。外面上半を横、縦、斜めと粗いハケ目、内面は肩部に指圧痕が残り、上部を横ヘラ削り、中程を斜



插図10 SI03内出土遺物図

めへラ削り、下段を縫へラ削りのあと指圧で仕上げている。淡褐色を呈し、緻密な胎土、硬質。最大胴径25.6cm。

楕形土器 (4)内湾気味に斜めに広く楕、端部を軽くつまみあげ丸くしている。やや先細。底部が少しふくらみ接地面を大きくして安定を増している。内外面とも横ハケ。外面上部においては横ナデ。細砂含む緻密な胎土、硬質。最大胴径25.6cm。

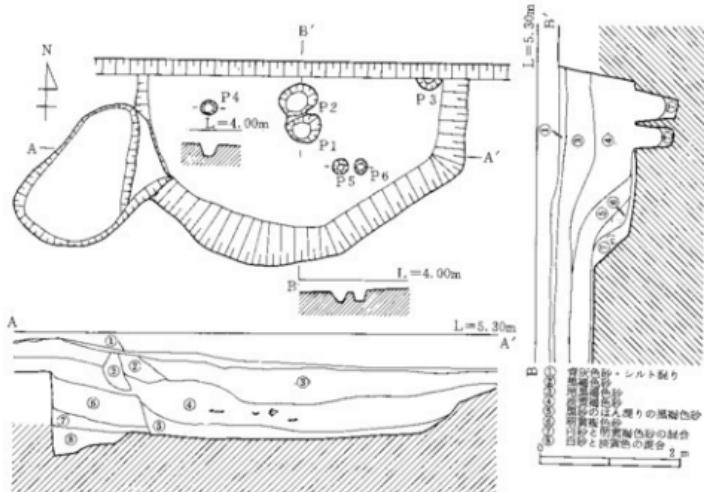
高杯形土器 (5)平坦な杯部底面から斜めにまっすぐ開く口縁をつくる。端部は丸い。外面は放射状のハケ目の後横ナデ、内面を放射状のヘラ磨きを施した後、横・斜めと不規則なヘラ磨き。黄褐色。口径14.3cm。(6)平坦な杯部底面から斜めにまっすぐ開く口縁をつくり端部でやや外反する。端部断面は丸い。外面は放射状のハケ目の後横ヘラ磨き。内面は横ハケの後放射状ヘラ磨き。外面赤褐色、内面赤乳色、口径16.3cm。(7)(6)と同様な口縁をもつが、(6)と比べて、器内が薄く聞くにつれて細くなる。脚部は穩やかに開いていく底部で器肉がやや厚くする。杯部外面を放射状のハケ目の後横ヘラ磨き、内面横ナデ。杯部と脚部の接合部をヘラでナデわずかな凹線を施す。脚部外面は縫ハケの後横ヘラ磨き、内面柱状部をヘラ削り、底部を放射状のハケ目で仕上げる。底部内面にヘラのようなもので縫の凸線が1本ある。赤乳色。口径15.6cm、器高12cm、脚幅径10.2cm。

S I 0 4 (挿図11・12・13、図版2・10・11・12)

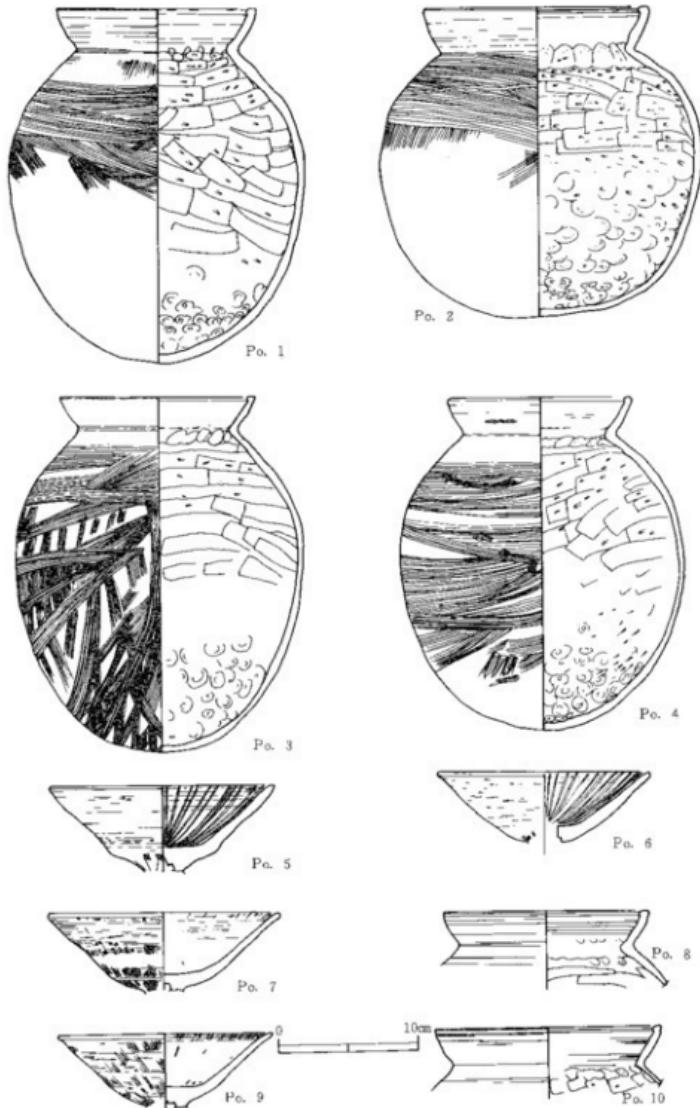
第3工区の最も北側に位置し、南側にSI03があり、東側にSB05がある。また、この住居跡はSD02と西側で重複している。この住居跡は、半分北側が今回の発掘調査区域外の為に掘っていない。

形態は、かなりいびつな方形か、あるいは長方形になると考えられる。床面から東側の壁の高さは48cmを測り、南側の壁の高さは51cmを測る。西コーナーから東コーナーまでの長さは、3.95mを測る。南側の壁がはり出している。備溝は検出されなかった。柱穴は床面に6本検出された。ピット間の間隔は、P₁から90cm、40cm、8cm、1m32cmを測る。柱穴プランは、P₁から順次の通りである。(24×20-18)(54×44-60)(52×42-56)(22×24-12)(18×22-14)(38×-32)cm、P₂から木炭を少量検出した。P₃は特殊ピットの可能性を持つと考えられる。遺物は、埋土中、及び床面から数多く出土しており床面を中心に図化できたものは、壺1、甌16、高杯5、杯1、低脚杯1である。甌P₀1は、口縁端部は若干内側に返る。スヌが、全体的に付着している。内側の上部は3分の2がヘラ削り、底部は指圧整形、外側は半分から上にハケ目整形が見えるが、半分から下は、スヌが付着の為、見えなくなっている。色調赤褐色、胎土石英混る、焼成は軟い。P₀2は、P₀1に比べると器高が低く胴がはる。外側は、部分的にスヌが付着し表面の胎土は、剥離している。外側上半分は、ハケ目整形し、内側の半分から上は、ヘラ削り、下は指圧整形、スヌが底部、胴部に部分的に付着する。胎土は石英、雲母が混る。色調黄灰色、焼成軟い。P₀3は、口縁部は、横ナデでやや端が内側にそる。外側は、全体的に、ハケ目調整を行ない、内側は、半分から上がヘラ削り、下は指圧整形。胎土は石英を含む、細

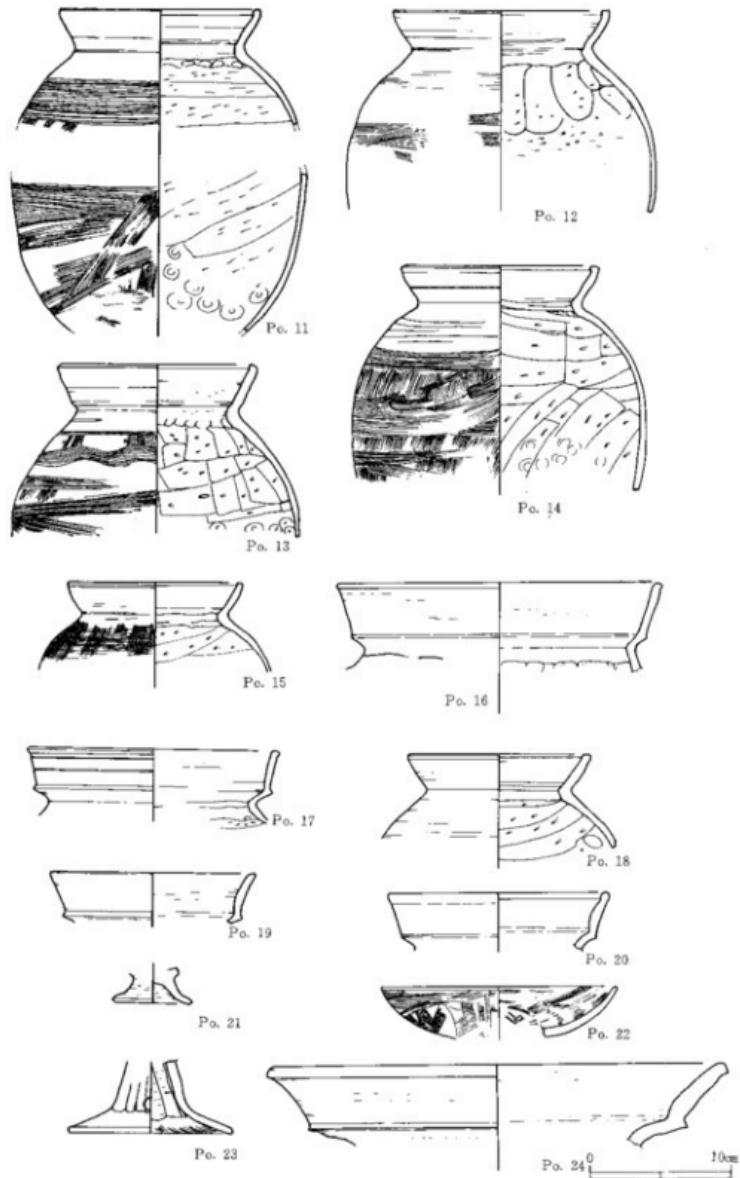
かい粘土を使用している。焼成は硬い。P₄は、ほぼ全体にわたって、表面はハケ目整形を行なっており、口縁部、頸部はナデを行なっている。内側は、ヘラ削りを行ない、下三分の一は指圧整形を行なっている。胎土は、あらめの石英を含み、焼成は良好で硬い。P₅は高杯の杯で、表面はハケ目整形の後に横にヘラ磨きを行ない、内側は、放射線上にハケ目調整を行ない、その後に横ナデを行なっている。胎土は石英、雲母を含み、色調赤褐色を示している。焼成は硬い。P₆は高杯の杯で、きめの細かい物を使用し、色調赤褐色、焼成は硬い。P₇は高杯の杯の部分で、外側は、ヘラ磨きを行なった後にハケ目整形を行ない、内側は、ヘラ磨きを放射線状に行なっている。P₈はカメの口縁で、口縁部の内側、外側とも横ナデを行なっており、内側に向かって内反している。頸部は指圧調整が見られ、その下にはヘラ削りが見られる。焼成硬い。色調黄褐色、胎土石英混る。P₉は、内側は放射線上にヘラ磨きを行ないハケ目整形の跡がある。焼成は硬い。色調赤褐色、胎土石英混る。P₁₀はP₈と同様の整形技法を用い、胎土、焼成度も同じ様相を示す。P₁₁は甕で卵形の器形で、外は全体にハケ目整形、内側ヘラ削り、底部は指圧整形を行なう。焼成は硬い、胎土石英混る。P₁₂は外側一部ハケ目整形を行ない内側ヘラ削り、中央から下は破損。色調、胎土とともにP₈と同じ様相。P₁₃は頸部の下に波状のハケ目調整が一条行なわれている。外側はハケ目整形、内側はP₄と同じ様相を示す。胎土は石英のあらいつぶが見られる。P₁₄は外側に大きなあらいハケ目が入り、口縁は円外横ナ



挿図II SI04遺構図



挿図12 SI04内出土遺物図

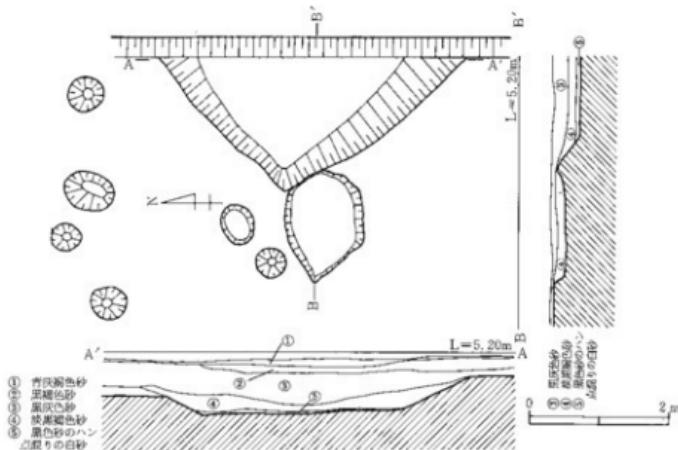


插図13 SI04内出土遺物図

デ、頸部円側指圧調整、内側の肩から下はヘラ削り、焼成、胎土はP_o2と同じ様相を示す。P_o15裏で口縁内外横ナデ、頸部から下はハケ目整形、内側頸部から下はハケ目整形、焼成硬い、胎土石英含む、色調黄灰色。P_o16壺の口縁で大形のものになる。口縁は内外横ナデ、頸部下に指圧調整が見られる。焼成硬い、胎土小石英つぶ混る、色調は赤褐色を示す。P_o17は壺の口縁で内側とも口縁は横ナデ、P_o16と同じ横相を示す。P_o18はハケ目が横ナデにて消えている。その他の整形技法はP_o15と様相を同じくす。P_o19は壺の口縁で内外とも横ナデ、色調赤褐色、胎土石英小つぶ混る。焼成軟い。P_o20はP_o19と同じ様相を示す。P_o21は低脚杯の脚部、P_o22は内外とハケ目整形を行なう杯。P_o23は高杯の脚。P_o24は壺の口縁。

S I 0 5 (挿図14・15、図版3・13)

SB05は第3工区の南東に位置し、北西のSB02と重複している。この壁穴住居跡の東側は発掘調査区域外のため未掘であるが、長方形か方形の住居跡になると考えられる。壁高は南側で48cm、北側で42cmを測り南側が高い。床面は北側で8cmほど低くなっている。側溝、またピットは検出されなかった。高杯の杯とこれとは別の高杯の脚の破片が床面から出土している。外側と内側の口縁部の一部にススが付着しているが焼成時のものであろう。内側は口縁部と平行にヘラ磨きを行なった後に、中心から外側に向かって放射状にヘラ磨きを行なっている。外側はハケ目整形を口縁部に向かって放射状に行なった後に、口縁部と平行にヘラ磨きを行なって



挿図14 SI05構造図

いる。胎土は雲母と石英の入った細かい粘土を使用しており、色調は淡い赤褐色を示す。焼成は良好。高杯の脚は内外の底部内面は指ナデ整形を行ない柱状部の内側はしづらこんだ跡がみられ、その後にヘラ削りを行なっている。外側は柱状部にては上から下へヘラで面どりを行ないその後に、指ナデを底端部まで行なっている。胎土は石英つぶ雲母が混り、あらい粘土を使用している。色調は内側が赤褐色を示し、外側が淡黄褐色を示している。焼成は良好。

(2) 掘立柱建物跡 (S B)

第3工区で5棟の掘立柱建物が確認された。3棟 (S B01・03・04) は主軸を北西—南東軸に向け、梁間1間、桁行2間の建築物であり、S B02は主軸を西南西—東北東軸に向けた、梁間1間、桁行3間の建築物であった。

遺物は、各建物とも柱穴掘り方からは余り検出できなかったが、柱穴掘り方の内側からは多数の土師器片が検出された。しかし、柱穴掘り方の内側の遺物は一括資料とは考えられない。ただ、これらの遺物はとびはなれて古いものや新しいものを含まぬために、各建物の築造時期は、これらの遺物の下限より築造上限を考えることにした。

S B 0 1 (挿図16、図版3)

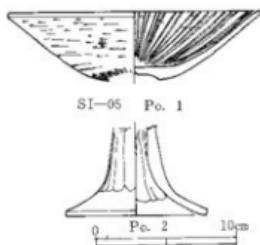
第3工区の南西側に位置し、SB02の西、SI02の北西、SX02の東にあり、SD01・04と複合する。主軸は北西—南東軸で、梁間1間、桁行2間の建築物である。桁行長3.51m、妻通長3.04mを測る。床面積は約10.67m²である。柱穴は北東隅に位置するものがSD01と複合し、検出することができなかつたが、P2～P6の5個を確認した。西側3個 (P4～6) の柱穴掘り方は、SD04と複合しているが、切り合い関係よりSD04が先行することが確認された。各柱間距離はP2より1.72・3.04・1.68・1.85mを測る。柱穴底の絶対高はP2より4.22・4.24・4.30・4.31・4.24mで差は9cmしかない。各柱穴プランはP2より(57×63—49)(57×55—54)(77×90—80)(66×65—66)(70×68—71)cmである。

遺物はP5から器台Po.1を検出した。鼓形器台の受部であり、内面はヘラミガキが施され、表面にはヘラミガキが暗文状に施されている。淡赤褐色で、胎土には砂粒が多く含んでいる。復元口径は27cmである。

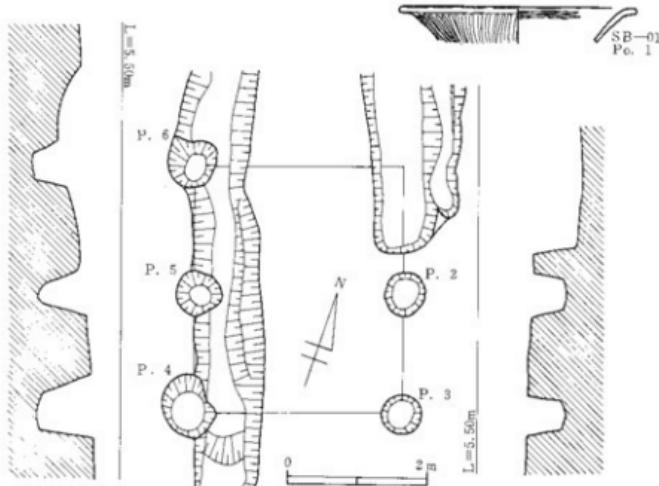
これらの遺物よりSB01の築造上限は、古墳時代前期末（青木Ⅳ期新）の時期と考えられる。

S B 0 2 (挿図17・18、図版3・13・14)

第3工区の南東側に位置し、SB01の東、SI02の北東、SD02の南東にあり、SI05と複合する。主軸は西南西—東北東軸で、梁間1間、桁行3間の建築物である。桁行長4.80m、妻通長2.64mを測る。床面積は約12.67m²である。柱穴は南東側に位置する2個がSI05と複合し確認



挿図15 SI05内出土遺物図



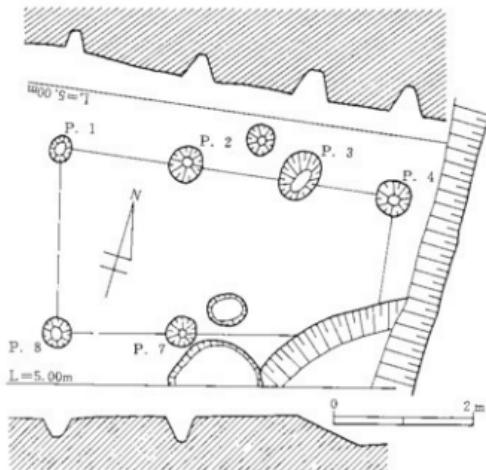
挿図16 SB01遺構図及び遺物図

できなかったが、6個を確認した。各柱間距離はP1より $1.82 \cdot 1.65 \cdot 1.35 \cdot \cdots \cdot \cdots \cdot 1.80$
 $\cdot 2.64\text{m}$ を測る。柱穴底の絶対高はP1より $4.16 \cdot 4.25 \cdot 4.23 \cdot 4.27 \cdot \cdots \cdot \cdots \cdot 4.20 \cdot 4.25$
 m で差は11cmしかない。各柱穴プランはP1より $(30 \times 38-29)(47 \times 53-35)(56 \times 72-41)$
 $(49 \times 50-40)(-)(-)(42 \times 44-37)(42 \times 44-27)\text{cm}$ である。

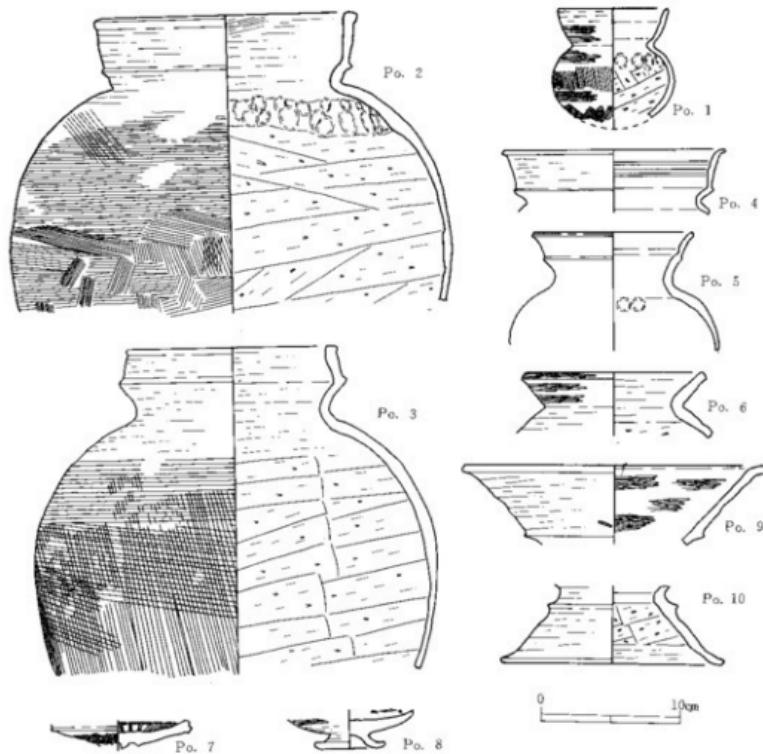
遺物は柱穴掘り方からは何も検出できなかったが、柱穴掘り方の内側より小型丸底壺P₀1、
 瓢P₀2～6、高杯P₀7、底脚杯P₀8、器台P₀9・10などの破片が検出された。P₀1は口縁が外
 側に開き胴部は球形である。外面は口縁から底部にかけてヘラミガキがヨコに施されており、
 胴部はその上にハケ目で仕上げられている。内面は口縁部ナデ、胴部はヘラケズリで仕上げら
 れている。淡褐色で、胎土には4mm粒の石英を含んでいる。復元口径は8cmである。甕はP₀6
 が「く」の字口縁である以外は複合口縁であり、P₀2・3は厚手で最大胴径は31・29cmと大型

である。口縁部はP₆3がやや内反している以外は外側に開き、ナデ仕上げである。胴部は、P₆2・3ともにタテ・ヨコのハケ目が施されている。内面はP₆2上半で指圧痕が認められ、他は全てヘラケズリで仕上げられている。P₆2が淡乳褐色、P₆3が淡黒褐色で他は淡赤褐色である。胎土には2~4mm粒の石英を多く含んでいる。復元口径はP₆2より19・15・17・11cmである。P₆6は口縁外面へラミガキ、内面ナデ仕上げである。淡赤褐色で、胎土には小石を多く含む。復元口径は13cmである。P₆7は有段式高杯の受部であり、表面ハケ目、内面はヘラミガキが暗文状に施されている。赤褐色で、胎土には3mm粒の石英を含む。P₆8は低脚杯脚部であり、内外面とともに上半でヘラミガキが施されている以外はナデ仕上げである。淡赤褐色で、胎土には砂粒を多く含む。P₆9・10は鼓形器台であり、P₆9は受部、P₆10は脚部で、両端部は面取りされている。表面はナデ仕上げであるが、内面は受部がヘラミガキ、脚部はヘラケズリで仕上げられている。両者淡乳褐色で、胎土には砂粒を多く含む。P₆9の復元口径は22cmである。

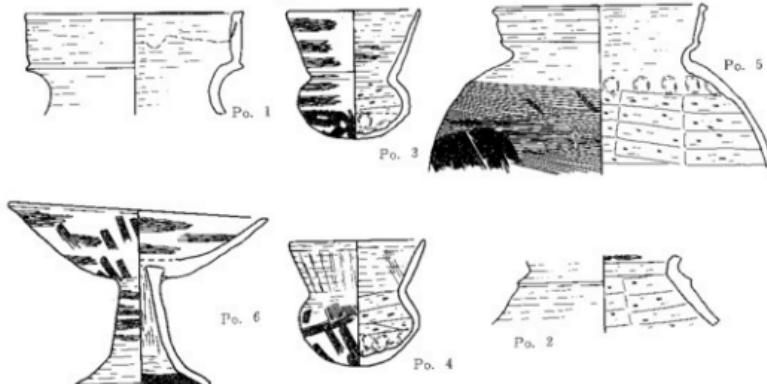
ただ、これらの遺物が柱穴掘り方の内側から検出されているために、一括資料とは考えられない点がある。そこで、これらの遺物の下限よりSB02の築造上限をみると、古墳時代中期前半（青木雅期古）の時期と考えられる。



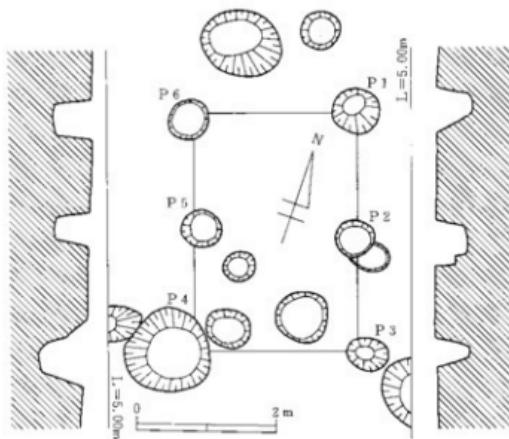
挿図17 SB02遺構図



插図18 SB02内出土遺物図



插図19 SB03内出土遺物図



捕図20 SB03遺構図

SB03 (捕図19・20、図版3・15)

第3工区のはば中央部に位置し、SB04の南西、SI03の南、SD02の北、SD03の西にある。主軸はSB01と同様北西—南東軸で、梁間1間、桁行2間の建築物である。桁行長3.55m、妻通長2.40mを測る。床面積は約8.52m²である。柱穴はP1～P6の6個を数える。各柱間距離はP1より1.93・1.63・2.73・1.85・1.57・2.40mを測る。柱穴底の絶対高はP1より4.12・4.20・4.17・4.00・4.24・4.24mで差は24cmである。各柱穴プランはP1より(67×64—51)(55×53—45)(59×48—47)(122×119—67)(57×53—49)(56×56—55)cmである。

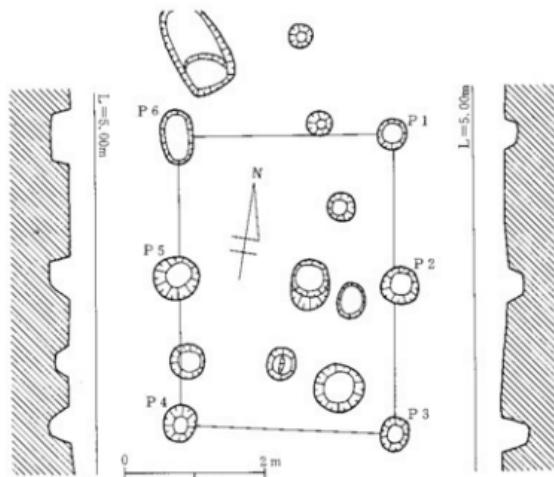
遺物はP4より壺P₀1、器台P₀2の破片が検出された。また、柱穴掘り方の内側からは小型丸底壺P₀3・4、甕P₀5、高杯P₀6などが検出された。P₀1は複合口縁で口縁は直立し、厚手である。内外面ともナデ仕上げである。淡赤褐色で、胎土には砂粒や雲母を多く含む。復元口径は16cmである。P₀2は鼓形器台の脚部であり、表面はナデ、内面はヘラケズリで仕上げられている。淡乳褐色で、胎土には砂粒を多く含む。P₀3・4ともに完形で、口縁は外側に開き脚部は球形である。P₀3の外面は口縁部から胴部中央にかけてヘラミガキが施され、胴部下半はハケ目で仕上げられている。内面には口縁部ナデ仕上げで、部分的にヘラミガキも施されている。胴部上半はヘラケズリ、下半は指圧によって仕上げられている。淡褐色で、胎土には砂粒を多く含む。口径は9.5cm、高さ9cm、最大胴径8cmである。P₀4は口縁部内外ともにナデ仕上げであり、脚部外側はハケ目仕上げ、内面は上半ヘラケズリ、下半指圧で仕上げされている。淡褐色で、胎土には砂粒を多く含む。口径は10cm、高さ9cm、最大胴径8.5cmである。P₀5は外面にやや開いた複合口縁であり、口縁部は内外面ともナデ仕上げで、脚部外側はハケ目、内面はヘラケズリで仕上げられている。淡乳褐色で、胎土には3～4mm粒の石英を多く含む。復元口径

は14cmである。P₆は形が変形しているもののほぼ完形であり、杯部から脚部にかけての外面にはヘラミガキがヨコに施され、杯部には部分的にハケ目が施されている。杯部内面はヘラミガキが施され、脚部内面はシボリをナデで消し、底端部はハケ目で仕上げられている。淡赤褐色で、胎土には2mm粒の石英を多く含む。

ただ、これらの遺物が一括資料とは考えられない点があることより、これらの遺物の下限よりSB03の築造上限をみると、古墳時代前期末（青木Ⅶ期新）と考えられる。

SB04（挿図21、図版4）

第3工区北東側に位置し、SB03の北東、SB05の南、SI03の東、SD03の北にある。主軸は北北西—南南東軸で、梁間1間、桁行2間の建築物である。桁行長4.28m、妻通長3.05mを測る。床面積は約13.05m²で、検出された据立柱建物5棟の中で最大である。柱穴はP1～P6の6個を数える。各柱間距離はP1より2.16・2.14・3.05・2.14・1.96・3.07mを測る。柱穴底の絶対高はP1より4.36・4.30・4.23・4.32・4.34・4.37mで差は14cmしかない。各柱穴プランはP1より(41×43-18)(54×53-21)(40×48-39)(46×53-32)(65×61-30)(47×



挿図21 SB04遺構図

77—28) cmである。

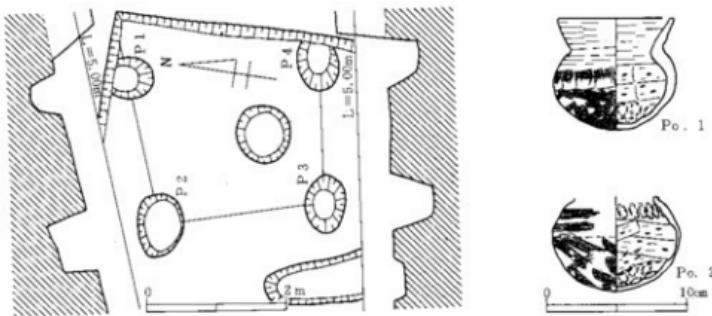
遺物は何も検出できなかったが、他の掘立柱建物の例から、古墳時代前期末～中期前半の時期とみられる。

SB 05 (挿図22、図版4・15)

第3工区の北東隅に位置し、SB04の北、SI03の北東、SI04の東にある。建物東側が調査区域外のため追求できなかったが、主軸を南西一北東軸に向かって、梁間1間、桁行2間以上の建築物であると推定される。妻通長は2.35mを測る。柱穴はP1～P4の4個が確認されたが、P1・4の柱穴掘り方は調査区域外に及んでいるためプランは不明である。各柱間距離はP1より2.14・2.35・2.10mを測る。柱穴底の絶対高はP1より4.12・4.00・3.94・4.10mで差は18cmである。各柱穴プランはP1より(59×—40)(86×66—52)(81×60—60)(×57—45)cmである。

遺物は柱穴掘り方からは何も検出できなかったが、柱穴掘り方の内側より小型丸底壺P_o1・2の他、少量の土師器片が検出された。P_o1は完形であり、口縁がやや短く外側に開き、胴部は球形で厚手である。口縁は内外面ともにナデ仕上げである。胴部外面は上半がナデ仕上げで、中央部から下半にかけてハケ目が施されており、中央部でその上からヘラケズリが施されている。胴部内面は上半がヘラケズリで、下半が指圧で仕上げられている。淡乳褐色で、胎土には雲母、砂粒を含む。口径は8cm、高さ8cm、最大胴径9cmである。P_o2は口縁を欠くが、胴部は球形であり、外面上半はヘラミガキが、下半にはハケ目が施されている。内面上半はヘラケズリであり、頸部付近と下半には指圧が施されている。また、下半には爪で押した痕もみられる。淡赤褐色で、胎土には雲母、砂粒を含む。復元最大胴径は9cmである。

これらの遺物よりSB05の築造上限は、古墳時代中期前半（青木唯期古）の時期と考えられる。



挿図22 SB05遺構図及び遺物図

(3) 溝状遺構 (SD)

第3工区で4本の溝状遺構が確認された。西側の3本(SD01・02・04)は共に北北西～南南東に平行にはしる深い溝であり、SD03は南西～北東にはしる浅い溝であった。

遺物は、各溝状遺構とも少量の土師器片が検出されただけであったが、SD01・04は掘立柱建物(SB01)との関係より、その上限を古墳時代前期末の時期に求めることができる。他の2本についても恐らくSD01・04の時期と余り変わらない時期ではないかと考えられる。

SD01(挿図25、図版3)

第3工区の南西部に位置し、東・西にあるSD02・04と平行して、ゆるやかな斜面に平行に北北西～南南東にはしる溝状遺構である。幅約134～222cm、深さ約64～80cmで長さ約6.72mを測る。南側でSB01と複合しているが、複合関係は確認できなかった。素掘りの溝で北に低いが、水の流れた痕跡は確認できなかった。

遺物は少量の土師器片が検出されたが、図化できなかった。

SD02(挿図23)

第3工区の中央部、SB03の南、SB01の北西に位置し、ゆるやかな斜面に平行して、西側にあるSD01・04と平行に北北西～南南東にはしる溝状遺構である。幅約60～90cm、深さ約43～52cmで長さ約7.95mを測る。素掘りの溝で南に低いが水の流れた痕跡は確認できなかった。溝底部よりピット2個(30×60—50)(22×38—56)cmが検出されたが、溝との関係を明らかにすることはできなかった。

遺物は少量の土師器片が検出されたが、図化できなかった。

SD03(挿図20)

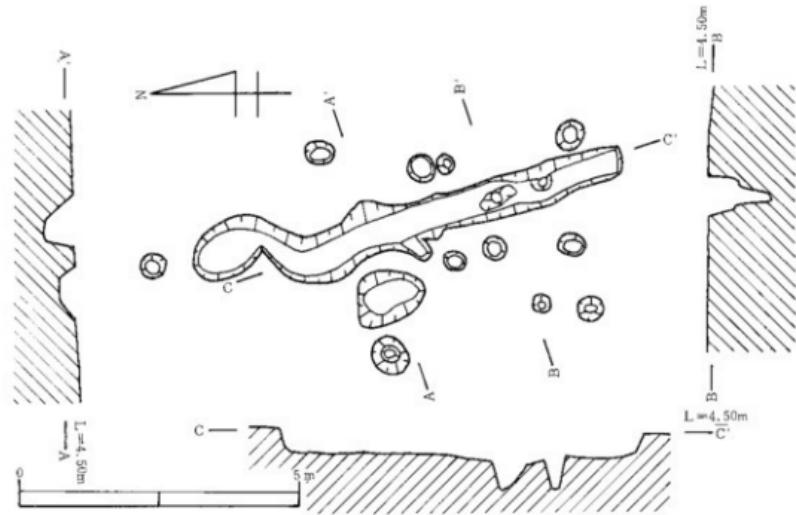
第3工区東側の平坦面に位置し、SB03の東、SB04の南にあり、他のSD01・02・04とは異なって南西～北東にはしる溝状遺構である。幅約46～56cm、深さは北東部が約30cmと落ち込んでいる他は約6～10cmと平坦である。長さは北東端部が調査区域外に及んでいたため追求できなかったが、約6.66mまで検出した。素掘りの溝でわずかに北東に低いが、水の流れた痕跡は確認できなかった。SD01・02・04の3本の溝と方向、深さが異なっている点より、性格の異なる溝とも考えられるが、全体の規模が不明であるため明らかにできなかった。

遺物は全く検出できなかった。

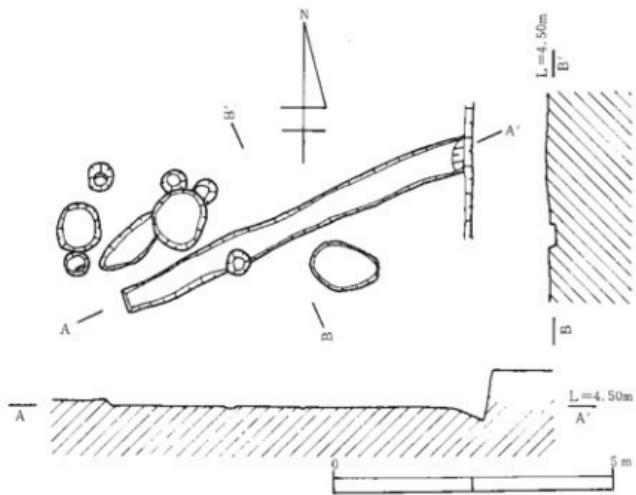
SD04(挿図21、図版3)

第3工区南西部、第2工区との境界、SX02の東に位置し、ゆるやかな斜面に平行して東側にあるSD01・02と平行に北北西～南南東にはしる溝状遺構である。幅約62～120cm、深さ38～113cmで長さ約13.50mを測る。西壁でSB01の西側3個の柱穴掘り方と複合し、その関係はSD04が先行することが確認された。素掘りの溝で、底部は中央部分が低く両端部が高くなってしまっており、水が流れた痕跡は確認できなかった。

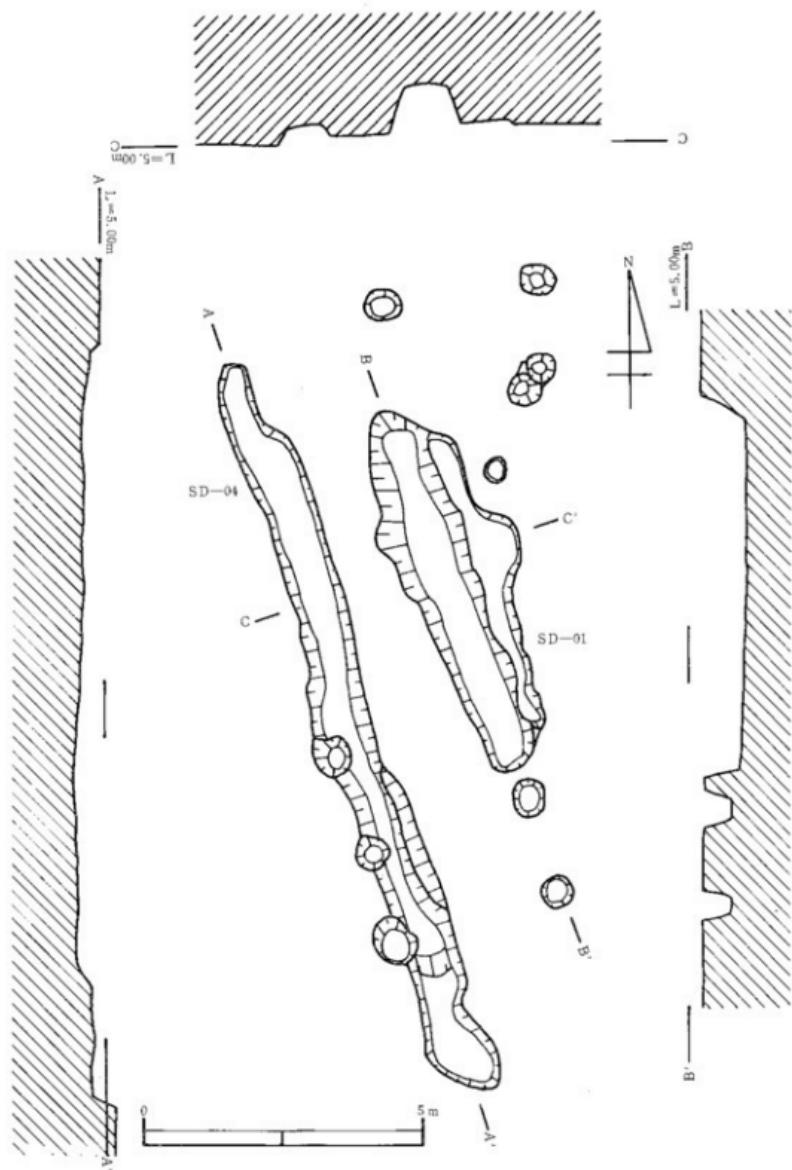
遺物は少量の土師器片が検出されたが、図化できなかった。



插図23 SD02遺構図



插図24 SD03遺構図

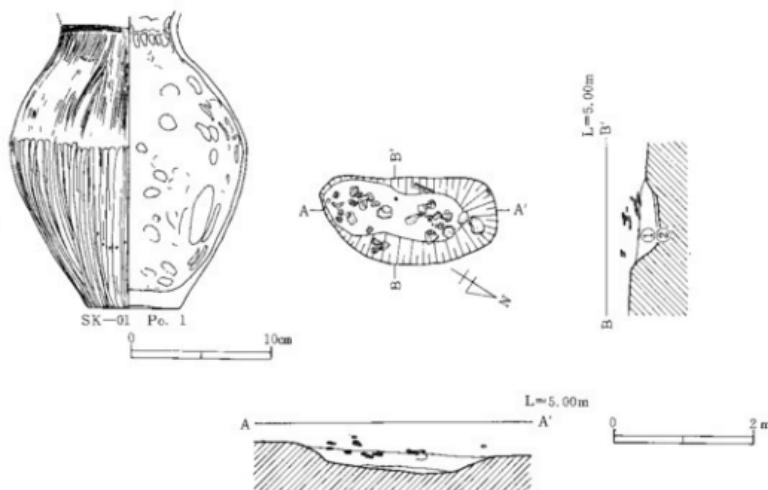


挿図25 SD01・04構造図

(4) 土 壤 (SK)

SK 01 (挿図26、図版4)

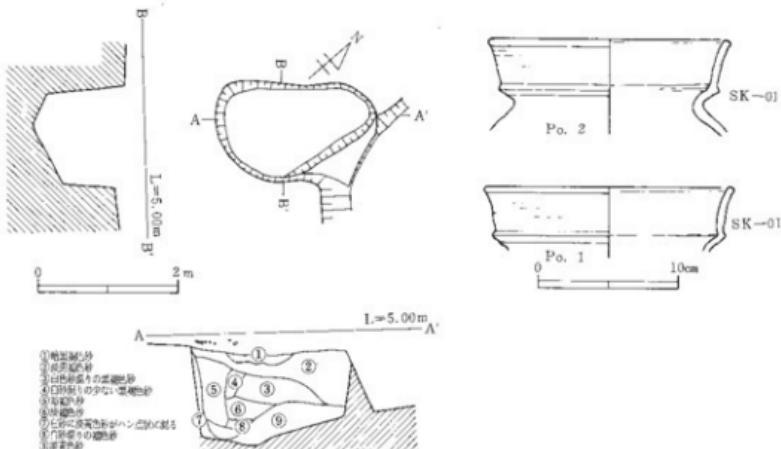
この土壤はSI02を掘り下げ中に検出した。位置は第3工区の南側であり、SI02と重複している。また南西にSI06が、北東にはSI05がある。形態は梢円形をしており、床面は飄簾状になっている。長径は2m45cm、短径1.22mを測り、最も深い所で38cm、最も浅い所で18cmを測る。中から弥生土器を一個体と板石38個を検出した。弥生土器の壺は、外側のはば中央から上はハケ目整形、中央から下に向ってはヘラ磨きが行なわれている。内側は全体にハケ目整形の後指圧整形を行なう。焼成軟く色調黄褐色。弥生時代中期中葉と考えられる。



挿図26 SK01遺構図及び遺物図

SK 02 (挿図27、図版2)

SK02は第3工区の南よりに位置し、SI04と切り合い関係にある。SI04がSK02を切っており、SI04が新しいと考えられる。形態は北西側が狭い梢円形で、主軸は北西—南東にあり、最も深い所で1.31m、最も浅い北西側で92cmを測る。長径は2.29m、短径は1.40mである。内部からの出土遺物は実測可能な壺の口縁部が2点である。 P_01 、 P_02 とも同様の形態を示す。 P_01 は内外とも横ナデが行なわれ、外側に外反している。色調は赤褐色を示し、胎土は石英混りで焼成は硬い。 P_02 は P_01 と同じく、その口縁部は内外とも横ナデで外側に外反している。胎土は石英混りで焼成は硬い。色調は赤褐色。

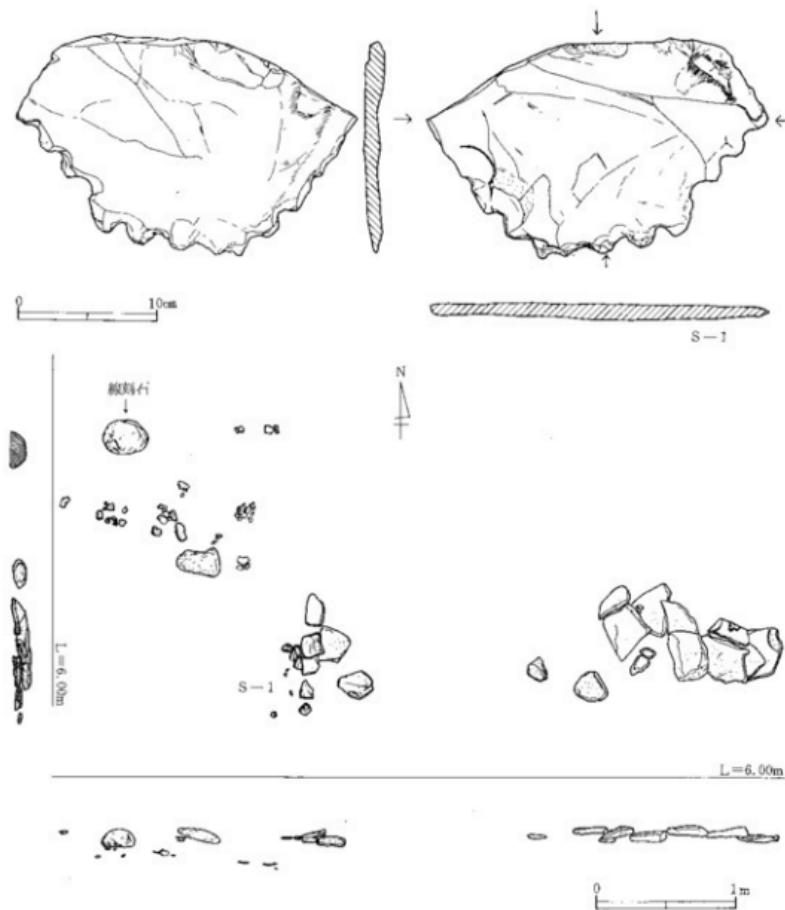


插図27 SK02遺構図及び遺物図

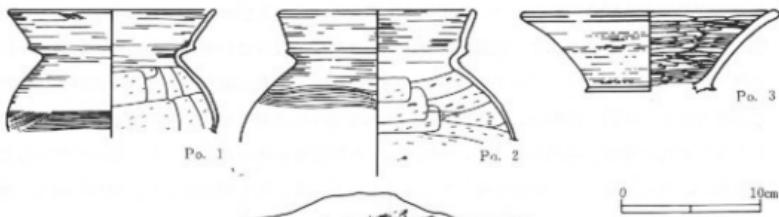
(5) 集石遺構および線刻石（挿図28・29、図版5・16・17）

第3工区南側に、多くの石が固まって出土した。これらの集石遺構の北側には、SD01・02、東にはSB02、SI05、南にSI02・06、西には、SD04、SB01がある。これらの集石遺構は、東側の巨石グループ、ノコギリ状に加工された石を含む中央グループ、北西側の線刻石と小さな板石のグループの3つに区別することができる。巨石グループは、割れてはいるが、 $80 \times 70 \times 28\text{cm}$ を最大として、 $50\text{cm} \sim 80\text{cm}$ 大の石が東西に7個部分的に重なるように出土した。中央グループは 50cm 大の石2個と、 $30 \sim 40\text{cm}$ 大の石3個、ノコギリ状加工石と、小さな板石で南北に構成されている。ノコギリ状に加工された石は、 $24.3 \times 14.8 \times 1.1\text{cm}$ の安山岩の穂錐貝形の石の1辺を両面から刃をつけたものである。線刻石は $50 \times 50 \times 28\text{cm}$ の半球形をしており、その側面に $0.6\text{cm} \sim 2.6\text{cm}$ の線刻がなされている。線刻は深いもので 0.4cm にもおよぶものがある。線刻は縦・横・斜めと何の法則性もないようと思われる。しかしながら、線刻の量が多く刻まれている面がある。その面を石面として考える説もある。それによると、自然石の自然の造型を巧みに活して顔とし、ごく簡単な、眼・口・鼻を線刻の髪を顔の横、後面につけ、一種の神として大切にされたということである。これらの石の下には何の遺構も認められない。線刻石の付近から甕・高杯・器台など土師器片が出土した。(1)外反気味に開く複合口縁を持ち、胴部中央が脹り出すそろぼん丸状の体部をもつと思われる甕型土器。口縁部端部は小頭気味に丸く終わる。外面口縁・胴部上半まで横ナデで仕上げるが、口縁部上方に一部、斜めのハケ目と思われるものがみられる。最大胴部より下方を、横・斜めのハケ目で仕上げる。内面は頸部下方より横ヘラ削り。石英砂等細砂含む緻密な胎土。硬質、黄褐色。最大洞部にスス付着。口径 14.5cm 。(2)やや

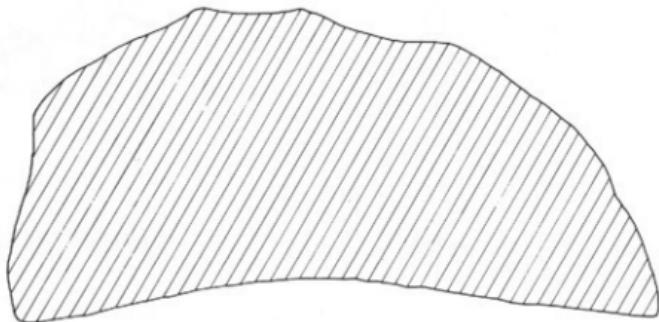
斜めに立ち上がる複合口縁をもつ。倒卵型の肩部をもつものと思われる。口縁端部を心持ち肥厚して丸味をおびた稜をなす。端部断面はわずかに凹状になっている。外面口縁一肩部にかけて横ナデ、肩部にゆるいジグザグの横ハケ、内面頸部から下方へ横ヘラ削り。石英砂等細砂含む緻密な胎土。硬質。黄褐色。口径13.6cm。(3)外反気味に立ち上がり、端部で更に外反して終わる蝶形器台の受部。端部断面は浅い凹線をもつが端部は丸味をおびている。稜はやや下方に向き鋭い。外面を横ナデ、内面を横ヘラミガキで仕上げる。淡赤褐色を呈し、緻密な胎土、硬質、受部口径18.2cm。



挿図28 集石造構及びノコギリ状加工石実測図



0 10cm



挿図29 線刻石及び付近の遺物実測図

(6) 鉄製品と石製品・玉製品について

鉄 製 品 (挿図30、図版18・19) (⑯は第1工区出土、あとは第3工区出土)

①鎌で、長さ12.2cmで、幅は中央で2.7cm、厚さ5mm、着装する部分は内側に折れ込む。②も鎌で、破損面までの長さは4.1cm、幅は3cmを測る。厚さは4mmで中央部から先が欠けている。着装する部分は内側に折れ込む。③は鎌である。長さは7.4cmを測り、先端部が欠ける。着装部は内側に折れ込む。④は鎌の部分の先端である。破損面までの長さは5.2cm、幅は2.4cm、厚さ3mmを測る。⑤は楔（くさび）状の鉄器で長さ3.2cmで幅2.2cmを測る。厚さは最も厚い部分で7mmを測る。⑥は棒状の鉄器で長さ11cmで幅1.5cm、厚さ7mmを測る。⑦は⑤と同様に楔形鉄器で長さ3.4cmで幅は2.4cmを測る。厚さは中央部で7mmを測る。⑧は小型の鉄斧である。長さ2.5cmを測り、幅は2.5cmを測る。厚さは3mm。⑨は針である。長さ5.6cmを測り、幅は6mmを測る。厚さ6mm。⑩は針である。長さ6.2cmを測り、幅は6mmを測る。厚さは6.5mm。⑪は鉄鎌で長さは5.7cm、幅は3.2cmを測る。厚さは中央部で4mm。⑫は鉄鎌である。長さは5.8cmを測り、幅は中央部で2cmを測る。厚さ2.5cmを測る。⑬は鉄鎌である。長さは5.8cmを測り、幅は1.9cmを測る。厚さは3.5mmを測る。⑭は刃の部分が破損しているが、鉄鎌になると考えられる。破損面までの長さ7.4cm、幅1cm、厚さ5mmを測る。⑮は板状の鉄に鋸をかぶせてあるものであり、白砂中からの検出である。長さ7cm、幅2.4cm、厚さ4mmを測る。⑯は鎌である。長さ7.8cm、幅は中央部で2.7cm、厚さ3.5mm。⑰着装するかえしのついた鉄製品である。破損面までの長さ8.2cm、幅中央部で1.1cm、厚さ5mmを測る。

石 製 品 (挿図31、図版18) (第3工区出土)

①大型の石の一面を平滑になるよう研磨している。研磨面中央には細い線状に溝が数条走る。長さ13.5cm。②大型の石を4面研磨している。破損しているために、もとの大きさはわからぬのが、長さは6.5cmを測る。③扁平な河原石で、3面砥ぎ面が入る。長さは14.9cmを測る。④大型の石を3面平滑にしている。長期間にわたって使用された感があり、りっぱな砥石である。長さは14.9cmを測る。⑤破損しているが、砥ぎ面が2面あり、一つの砥ぎ面には溝が入る。長さは5.8cmを測る。⑥小型の砥石の破片で砥ぎ面は3面認められる。仕上げの段階で使用する砥石ではないかと思われる。長さは4cmを測る。⑦石ノミ形の石製品で、細かい砥ぎ面がある。長さは5.1cmを測る。

(図版9の9)は弥生時代中期中葉で青木の0期に位置する弥生の器台の口縁の破片である。第3工区のSI02の北側で出土しており、SI01に関係する可憲性をもつ。口縁の上部平坦面には波状クシ目文が入り口縁部外側には平行沈線の後に口縁部に直角に沈線が入り、その上に円形のつつ状の粘土を貼り付ける。色調黄褐色。胎土、石英、雲母混じる。焼成歓い。

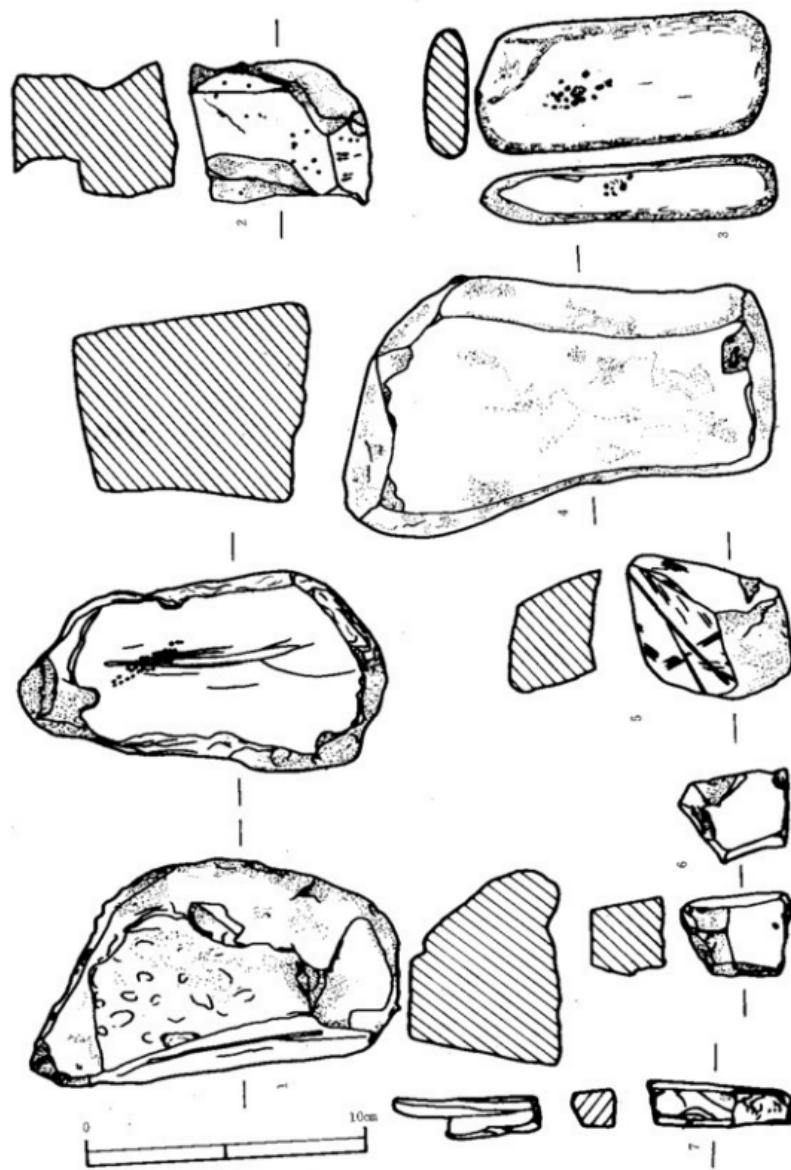
玉 製 品 (挿図32、図版18) (第3工区出土)

① 管玉。長さ3.1cmを測り、直径7mmを測る。碧玉製で、両面から穿孔している。

② 丁字頭状勾玉。長さは3.5cmを測り、T字状に溝が頭部に入る。滑石製である。両面から



插図30 鉄製品実測図

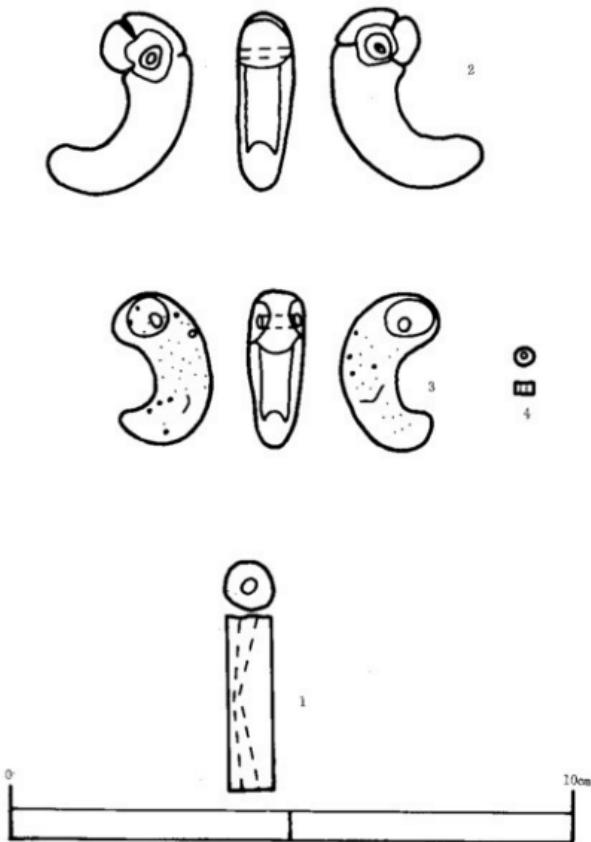


插図31 石製品実測図

穿孔している。

③ 勾玉。②よりは小型のもので、長さは2.7cmを測る。

④ 小玉。長さ2.5mm、直径3mmを測る。滑石製である。



挿図32 玉製品実測図

第4章 考察編

第1節 石製模造鏡

第1工区SI01内から滑石製模造鏡が出土した。山陰における石製模造鏡の出土例は少なく、長瀬高浜遺跡のバイパス地区、下水道地区で各1面、倉吉市上神地区で1面、秋里遺跡で1面と計4面を数えるにすぎない。これを考えてみると、鳥取の東部に1面、中部に3面（うち2面が長瀬高浜遺跡で出土）、西部では出土例がない。これに対して同じ模造鏡でも土製のものがある。土製模造鏡は米子市福市遺跡で1面、同青木遺跡で2面出土しており、土製模造鏡に関しては東・中部にみられず、西部に集中している。また銅製の模造鏡と考えられる素文鏡が、長瀬高浜遺跡で3面出土しており、長瀬高浜遺跡は総計10点のうち5点を出土している特徴をもつ。このことから、模造鏡は鳥取県全域にわたって少量ではあるが出土していることがわかる。これに対し、島根県では現在のところ出土例をみない。一部には有孔円板を石製模造鏡と考えられているが、出土状況や遺物形態からその説は否定されよう。

このような石製模造鏡が出土するということは祭祀的要素を含んでいると考えられる。というのも、SI01では手づくね土器（P_{20・21}）や、高杯・小型丸底壺の破片が異常に多く、勾玉状石製品（S2）もあり、朱のすり石（S1）が柱穴（P1）から出土するなど、他の下水道地区的豊穴住居址と比較して祭祀的要素が特に多いように思われる。

さらに視野を広げてみれば、第3工区の集石遺構および線刻石が目につく。前述のごとく線刻石を「石面」として一種の神とする説をとるならば、集石遺構をその祭壇と考えることが、位置的にまた出土遺物等からいえるのではないであろうか。そして、その祭祀形態の一連の祭器として模造鏡や上記の遺物が使用されたと考えるならば、これは、長瀬高浜遺跡での古墳時代前期末から中期初期の「祭祀」のあり方と考えができるのではないか。

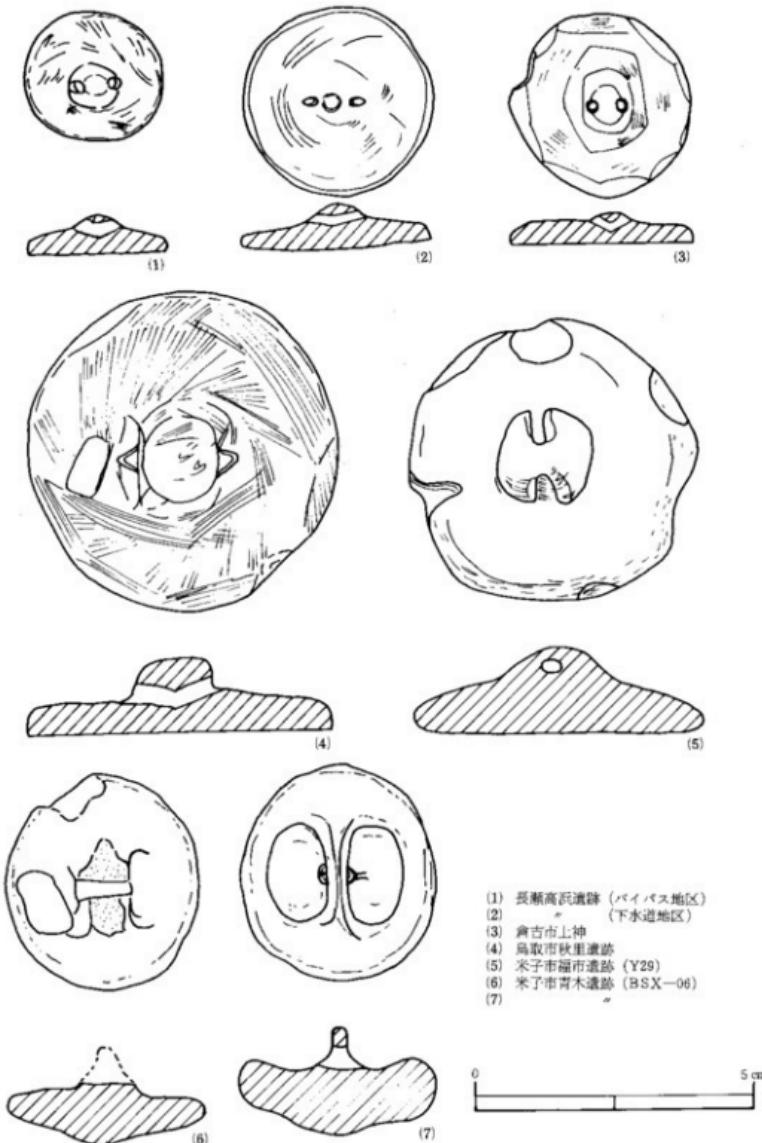
次に、遺物について簡単な説明を述べる。

(1) 長瀬高浜遺跡（バイパス予定地）SI01内出土。滑石製で黒色を呈す。面径2.5cm、厚さ端部で0.3cm、腹部がやや盛りあがり鉢が造り出され、両側から0.2cmの孔が貫通する。

(2) 同遺跡（下水道地区）11Fより出土。滑石製で青緑色を呈す。面径3.4cm、端部の厚さ20.2cmで腹部7.5cmと紐の部分が盛り上がっている。0.2cmの孔が両側から貫通する。

(3) 倉吉市上神・遺物包含層より採集。滑石製で黒灰色。面径3.2cm、厚さは端部で0.3cm、腹部で5.5cmと前述の(1)・(2)と同様腹部がわずかに橢円形に盛り上がり紐をつくる。その両側から0.2cmの孔が貫通する。

(4) 鳥取市秋里遺跡出土。山陰で出土している石製模造鏡のうちで最大のもの。滑石製で緑色。面径5.6cm、厚さは端部で0.4cm、腹部で0.6cmあり、高さ0.5cmの鉢を造り出している。両側から0.4cmの孔が貫通する。鏡面は研磨され光沢をもつ。背面は巾0.3～0.4cmの棒ヤスリ状の工具で右回転の整形がなされており、凹んだ痕跡を見ることができる。



插図33 模造鏡集成図

- (5) 米子市福市遺跡、吉塚29号住居址より出土。土製。茶褐色。鉢をつくり、2mmの孔をもつ。
(6)(7) 米子市青木遺跡BSX06より出土。土製。鉢孔1個。指で鉢をつまみあげ指ナデで整形^(捏ね)している。灰褐色で、焼成硬い。

注 1. 倉吉博物館、真田広幸氏より資料紹介および御指導をあおいた。

2. 大谷従二「出雲地方原始彫刻について」文化財20号、1973年。

3. 鳥取市教育委員会『秋里遺跡I』1976年。

4. 山陰考古学研究所『福市遺跡の研究』1969年。

5. 青木遺跡発掘調査団『青木遺跡発掘調査報告書III』1978年。

第2節 黒砂の分布

バイパス地区における黒砂（遺構・遺物包含層）の分布範囲は、図36でみられるように第2工区東側部分と隣接する第3工区全域で確認された。

調査当初バイパス調査地区の黒砂の分布は、現在隣接する南側で発掘調査の行なわれている下水道地区的黒砂の分布範囲が、図36でみられるようにJラインまでではあるが、16ラインから北西方向に延びているように考えられることと、同地区調査に先駆けて行なわれた黒砂確認のための試掘調査で、15K地区中央付近で現砂丘下20~50cm（標高8.60m）の比較的浅い地点で、耕作のためにかなり攪乱されてはいるものの土器片等の遺物を多く含む黒砂が確認されていることより、現砂丘下50~60cmの比較的浅い地点で調査地区全域を被覆していると予測された。

しかし、調査が進むに従い第1工区からは、図34で示した小型丸底壺をはじめ少量の土師器片、埴輪片等が耕作砂中より検出されたものの、黒砂はわずかに南側で現砂丘面より60~80cm耕作砂を下げた標高5.80~6.00mの地点で、SI01の掘り方として確認されただけであった。また同様に第2工区西側でも耕作砂中で少量の土師器が検出されたものの黒砂は確認されなかった。

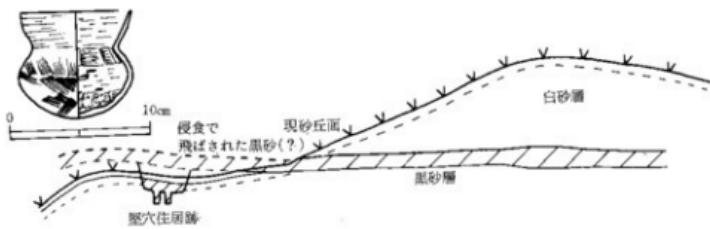
即ち、第1工区南側でわずかにSI01の掘り方として確認されただけで、調査当初の黒砂分布の予測は違っていたことになる。そこで、残された未調査地区（第2工区東側、第3工区）の黒砂の有無が問題となり、ボーリング調査を行ない黒砂の確認を行なった。

ボーリング調査は、調査地区東側の14ラインと第2工区、第3工区間の15ラインで行なわれた。その結果、15ラインでは現砂丘下70~130cm（標高5.60~6.00m）で、また14ラインでは170~200cm（標高4.80~5.10m）で黒砂を確認した。

これにより、バイパス地区の黒砂分布範囲は、図36に斜線で示したとおりであり、調査地区を東西に二分する形で存在することが判明した。黒砂の消滅している地点は、西から東へ高くなっている現砂丘面と東から西へ高くなっている黒砂とが接する地点である。

以上のことにより、バイパス地区の黒砂の分布を復元するならば、黒砂は第1工区南側でSI01、また消滅地点のすぐ西でSX01が確認されたこと、そして耕作砂中より土師器片や埴輪片が検出できたことより、調査地区全域を被覆していたと推察される。そして、現在でも風食や雨食など

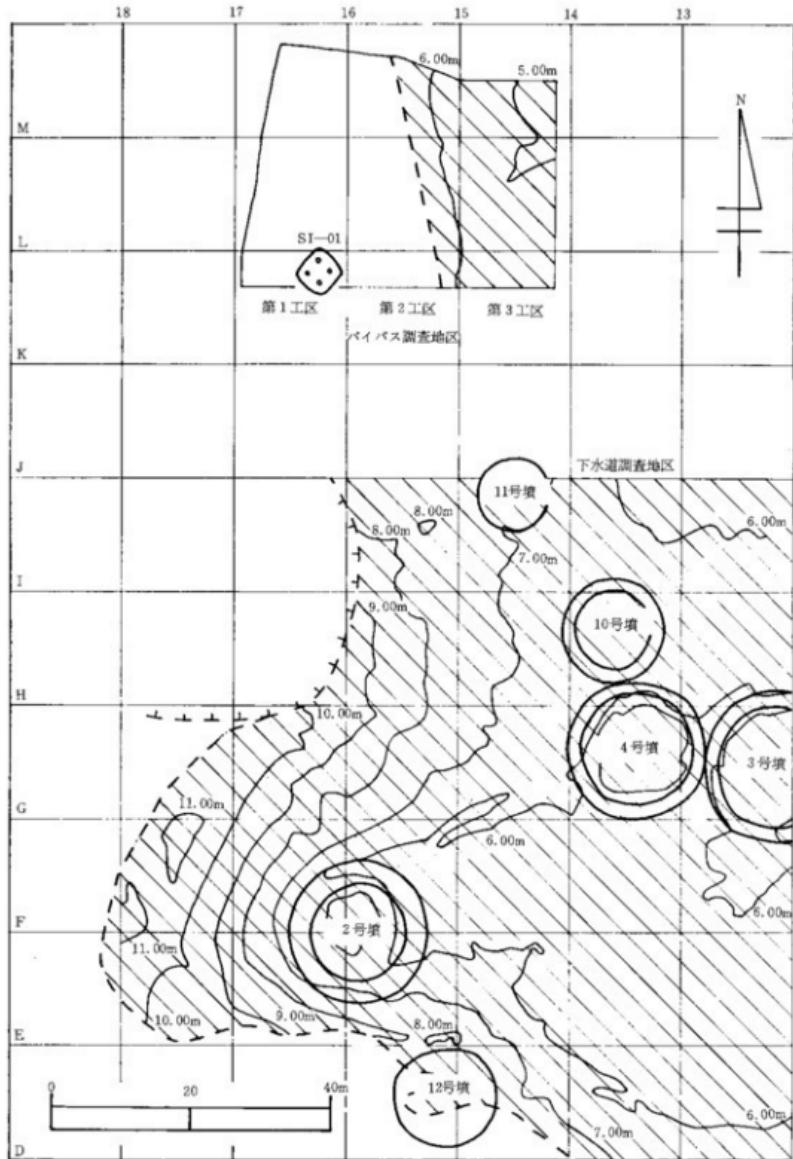
の侵食作用によってかなりの部分が失われていることが認められることより、この地区の場合でも侵食作用（主として西北風による風食）によって失われたり、また耕作によって攪乱されたと推定される。そして、黒砂層より下に深く掘り込まれたSI01・SX01の部分だけが侵食作用を受けずに残されたのではないかと考えられる。



挿図34 黒砂の分布概念図及び白砂中出土土器実測図



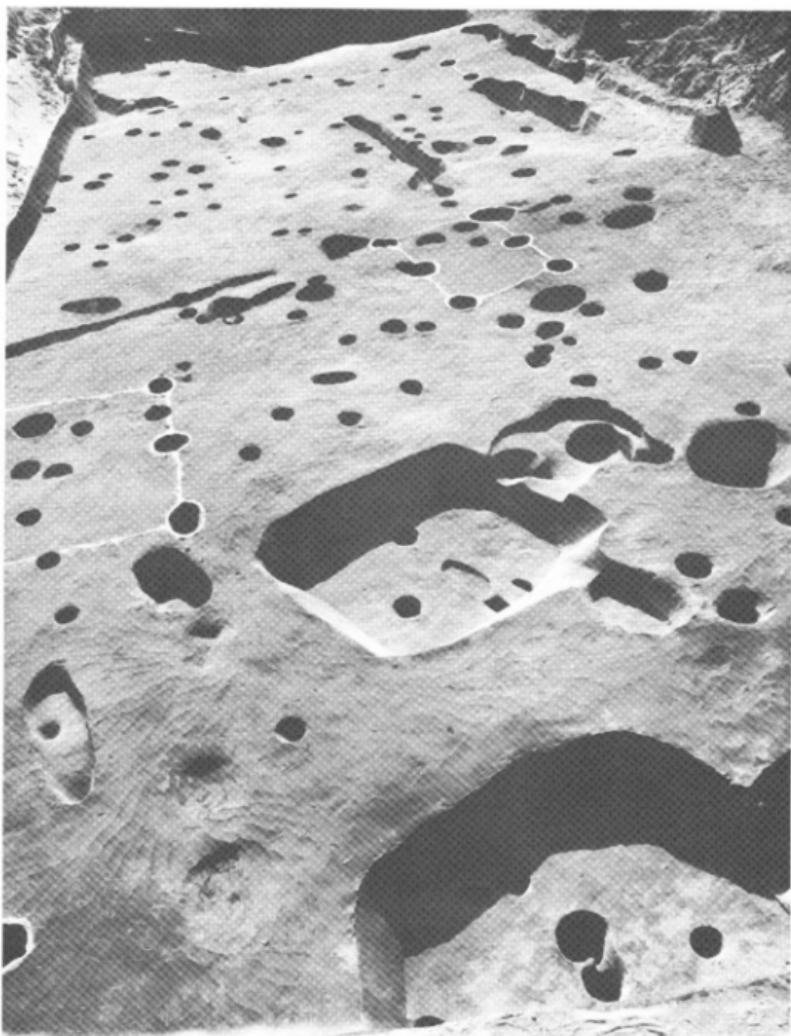
挿図35 バイパス地区の黒砂分布状況



挿図36 黒砂分布全体図

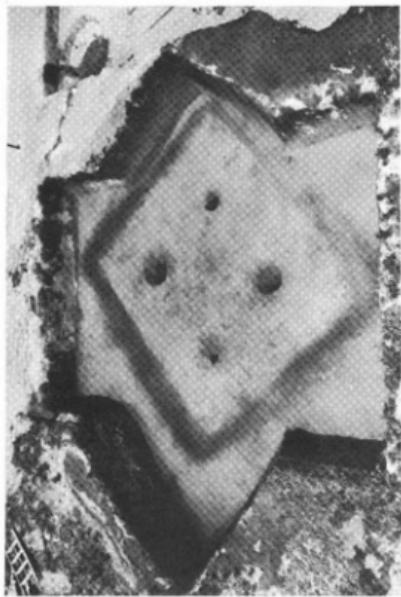
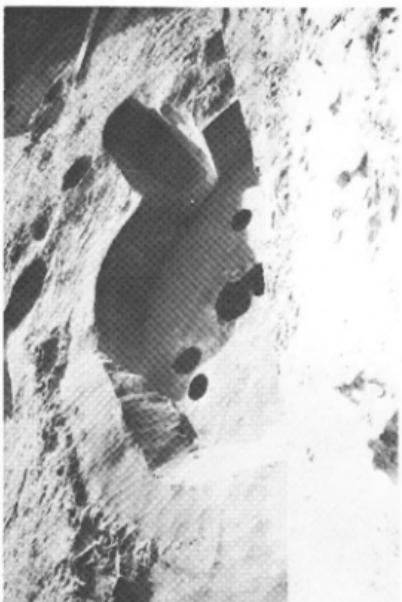
第5章 ま と め

今回の北条バイパス予定地内(2,000m²)の発掘は6月1日から始められた。黒砂の堆積は第1工区、第2工区では非常にわかりにくくなってしまっており、大部分が北西風で吹き飛ばされたうえに、耕作機械によって擾乱され、第1工区ではSI-01、第2工区ではSX01とSX02を検出したにすぎない。砂丘遺跡の発掘は崩れやすく、せっかく掘った遺構の中に壁の白砂が崩れてくるという事態が、たびたび起りうる。また遺構の掘り込みの境界が明確に検出できない。しかし黒砂の中に包含されている土器は非常に保存状態が良い。今回の調査区域の南側の下水道地区では掘立柱建物跡が少なく、堅穴住居跡が多いという傾向がみられるが、当地区においては掘立柱建物跡が比較的多く検出された。堅穴住居跡は完掘できたものが2棟、あと4棟は半分ほど発掘調査区域外にくい込んでいる。今回の調査した遺構の時代を推定すると、SI01は古墳時代中期(青木Ⅶ期古)、SI02、SI06は古墳時代中期前半(青木Ⅶ期)と思われる。SI03は古墳時代前期末(青木Ⅷ期新)、SI04は古墳時代前期末(青木Ⅷ期新)、SB01は古墳時代前期末(青木Ⅸ期新)、SB05は古墳中期初頭(青木Ⅹ期古)、SK01は弥生時代中期中葉、SK02は古墳時代前期後半(青木Ⅺ期古)、SDは遺物がないのがSBの時期に近いものと考えられる。SX01は古墳時代前期後半と思われ、SX02は遺物はないが近い時期にくると考えられる。鳥取県中部での集落遺跡の調査は、倉吉周辺の低丘陵地帯に集中していましたが、今回の調査で、SK01の土壌が弥生時代に作られ、さらにその後の古墳時代前期後半になってから村が営なまれ、古墳時代中期前半までづいていたと考えられる。この村落がいつまで営まれたかはわからない。今後、下水道地区を含めて黒砂のみられる砂丘地の発掘調査の成果が大いに期待されるところである。



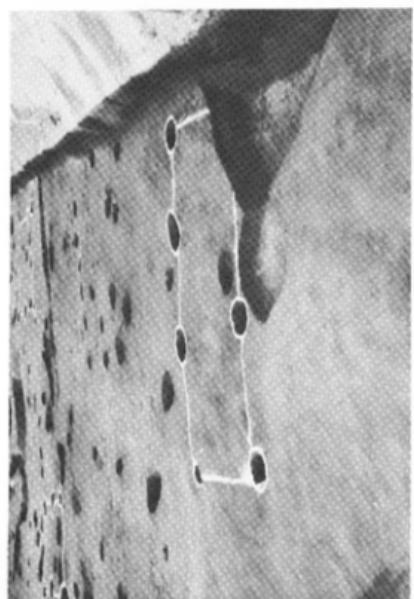
第三工区全景 北から

図版 2

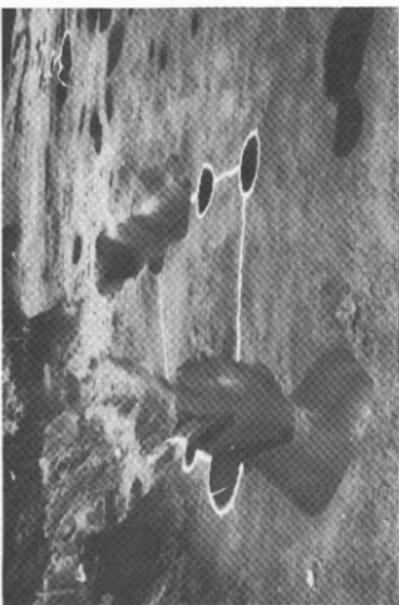
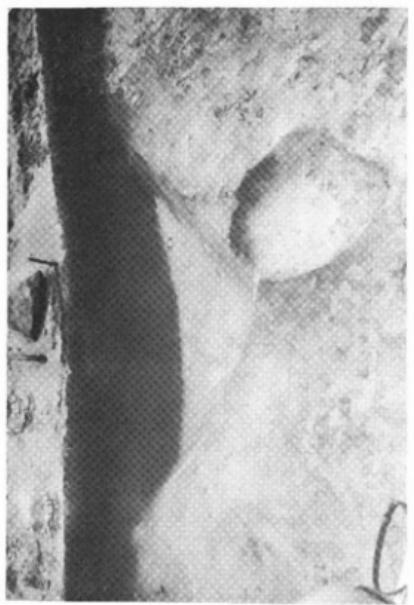


上 SI-01
下 SI-02, 06
東 SI-03
下 SK-01
西から
北から

図版 3



上 SB02・SI-05
下 SB03

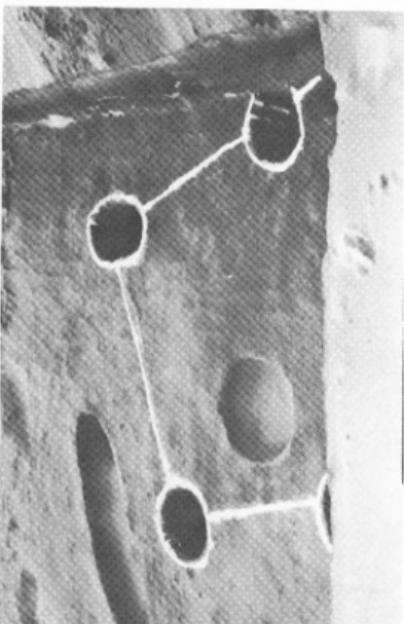
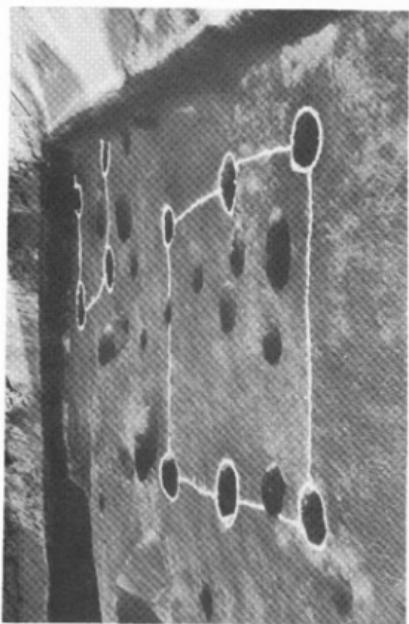


上 SI-05
下 SB-01・SD-01

図版 4



上 SX-01 南から
下 SX-02 北から



上 SB-04.05 南から
下 SB-05 東から

図版 5



上 SK-01北から
下 SK-01内出土状況



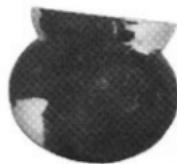
上 集石遺跡 東から
下 集石遺跡 西から



1

SI-01 1. Po. 4
2. Po. 5

2



2

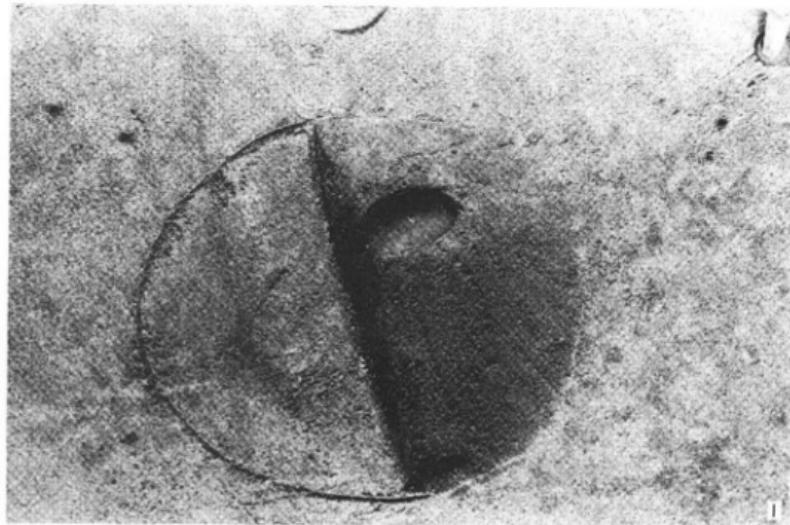
3



4

5

SI-01 1. Po. 6 4. Po. 20
2. Po. 17 5. Po. 21
3. Po. 18

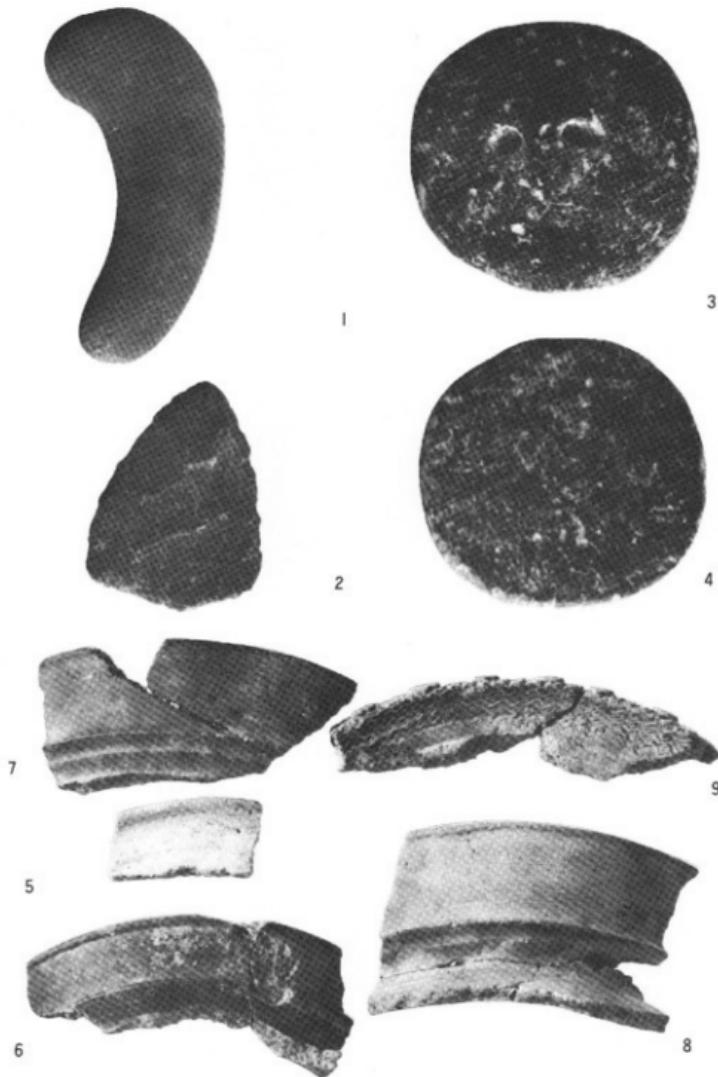


2

上 SI-01、P I 内 S-I 出土状況
下右・左 S-I



3



1. SI-01	勾玉状石製品	5. SI-02	Po. I
2. "	石鎌	6. "	Po. 2
3. "	石製模造鏡ウラ	7. SK-02	Po. I
4. "	表	8. "	Po. 2
9. 第3工区出土 弓生土器			



2



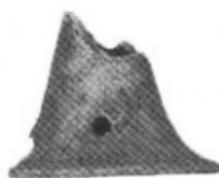
3



4



5



6

1. SI-03 Po. 1 4. SI-04 Po. 7
2. " Po. 4 5. " Po. 9
3. SI-04 Po. 5 6. " Po. 23



1



2

SI-04 上 Po. 2
下 Po. 3



2

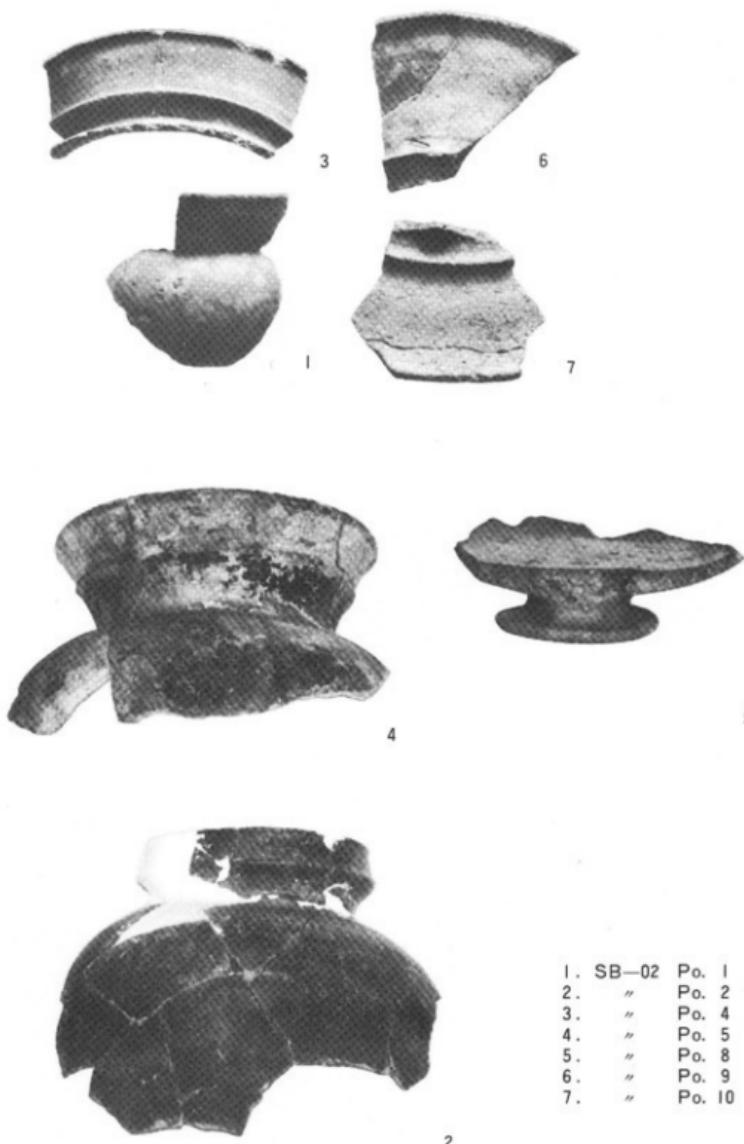
SI-04 上 Po. 4
下 Po. 11

図版 13



1. SI-05 Po. 1 3. SK-01 Po. 1
2. " Po. 2 4. SB-02 Po. 3

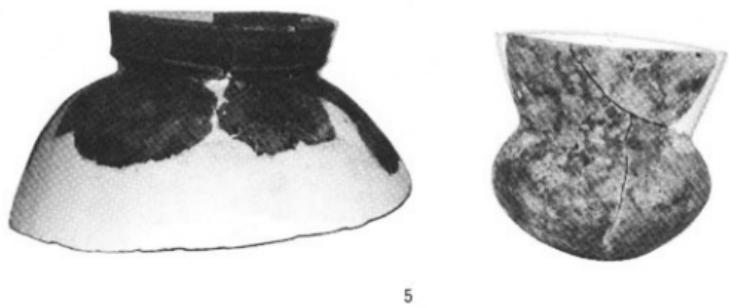
図版 14



図版 15

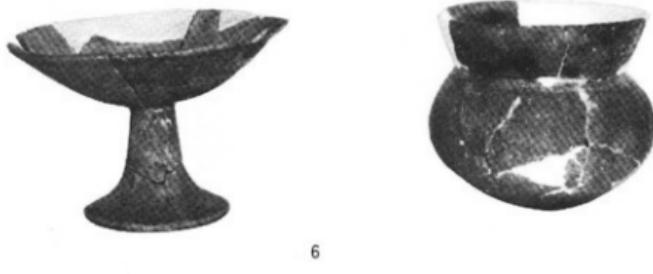


3



4

5



7

6

- | | |
|----------------|----------------|
| 1. SB-03 Po. I | 4. SB-03 Po. 4 |
| 2. " Po. 2 | 5. " Po. 5 |
| 3. " Po. 3 | 6. " Po. 6 |
| 7. SB-05 Po. I | |



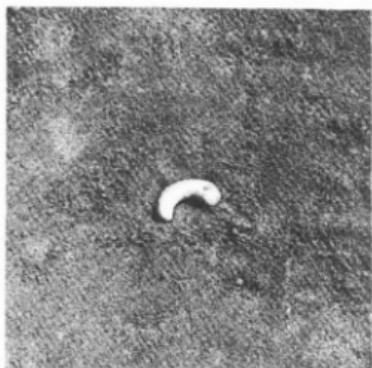
集石遺構内 ノコギリ状加工石



線刻石上下



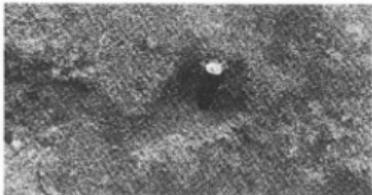
石 製 品



勾玉出土狀況



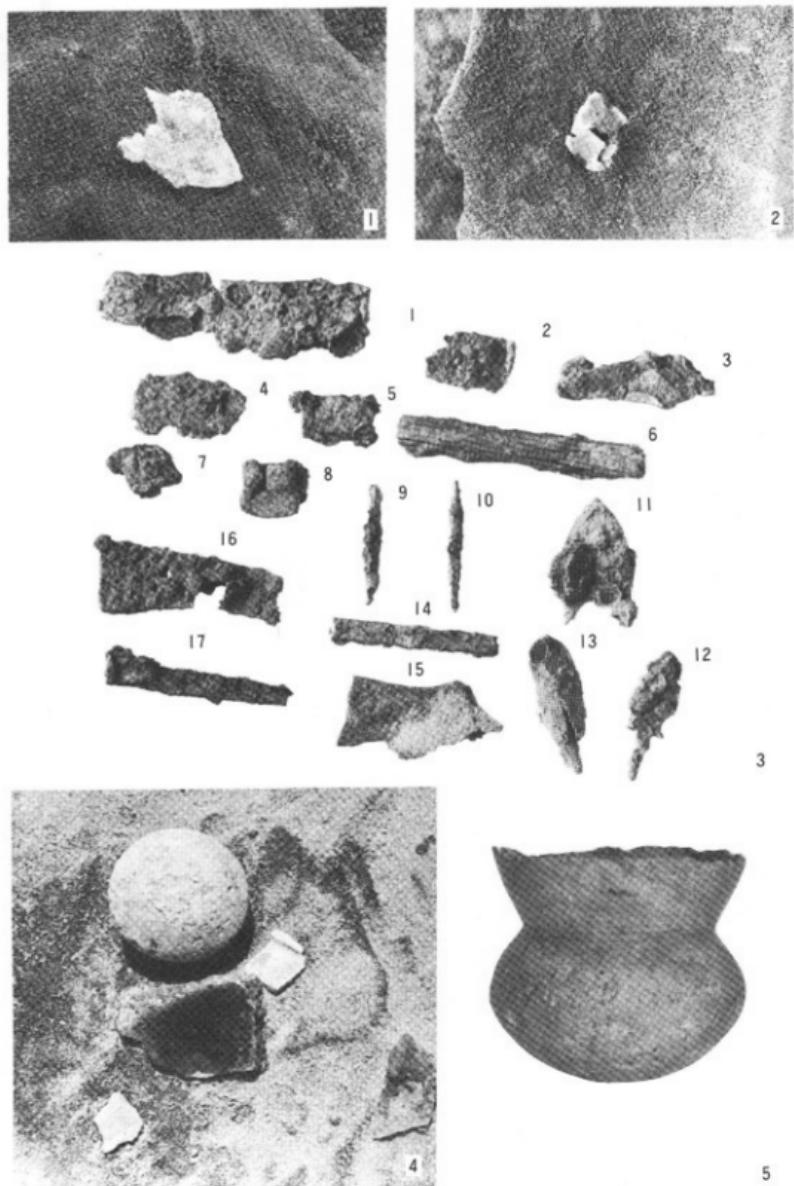
勾玉出土狀況



管玉出土狀況



鐵製品出土狀況 (針)



1. 鉄器出土状況（鉄鎌）
2. 鉄器出土状況（鉄斧）

3. 鉄 製 品
4. 白砂中遺物出土状況
5. 白砂中出土土器

長瀬高浜遺跡発掘調査報告書 I

一般国道9号線改築工事（北条バイパス）に伴う埋蔵
文化財発掘調査報告書

発行日 1980（昭和55年）3・31

発行者 財団法人鳥取県教育文化財団

〒680 鳥取市扇町21

TEL (0857) 27-5252

印 刷 勝美印刷株式会社鳥取支店
鳥取県東伯郡羽合町長瀬